
ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

ジュラルミンダンボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

【Nコード】

N1204T

【作者名】

ジュラルミンダンボール

【あらすじ】

ハローハロー人類諸君。SEEDが消え去ってメダシメダシってならなくて残念だったね人類諸君。ところで人類諸君。完全に人の形をして、人のように感情を持ち、人に紛れて人のように暮らすSEEDがもしも居たとしたら人類諸君。人類諸君は、どうするね？

第一話「死にたいわけじゃない。」（前書き）

やっちまった！　なんてこったい！　まあ良いか。そういうワケでまさかの連載二本目投下です。ファンタシースターポータブル2の主人公がもしも×××××だったら？　という内容のお話です。とりあえず主人公のプロフを。

名前…リア・ゲート

性別…女性

種族…ヒューマン（?）

年齢…27歳

身長…174R P

体重…62K V

タイプ…レンジャー

服装…上下共にストーリアの黒黒

その他…髪は少し短め。肌が色素が無いかのように白い。瞳は黄色と言うより金色で、白目が黒い。左目を眼帯のようなヘッドマウン
トディスプレイで隠している。

程よい大きさと良好な形をしている。

第一話「死にたいわけじゃない。」

「あらあら、随分と人が多いのねえ。」

海底レリクスにて。実力さえあれば誰でも可との事だったので来てしまった。面接の後の抜き打ちテストという名の不意打ちに手荒く対処してしまい、随分とひどい怪我をさせてしまったのが悔やまれる。とりあえずは狙い通りに、簡易携帯食の配給が配られる。

適当な場所に腰掛けて配給を食べていると、不意に声を掛けられる。そこそこ身長の高い、男性型のキャストのようだ。

「よう。所属無しって事はフリーか？」

「ええ、まあ。」

「そうか。それは大したモンだ。場所が場所ってだけに腕利きを集めているのかもしれない。」

「そうですねえ。このレリクスは最近見付かったモノ、だそうですね？」

「ああ。発見されたのはごく最近で、この辺りまでは安全なようだが、奥は正に未開の地ってワケよ。久しぶりに儲けが出そうだな。」

「んー、でも人数が人数ですし、山分けてなると少し心配ですねえ。何人が殺しておいた方が・・・」

「おいおい、冗談でもそれは止めておけよ？　ここは未開のレリクスなんだ、何が出るか分かったモンじゃない。まあ、放っておいても何人か死人も出るんじゃないか？」

といった具合の不謹慎極まりない話題で盛り上がっていると、少し離れた所から高くて幼い感じのする、女の子の声が聞こえてきた。
「帰ろう！　帰ろうって！」

男性キャストが後ろの方で駄々をこねている女の子の方を見る。

「なんだ？　あの子供は？」

「さあ？　実戦未経験にしか見えませんか・・・？」

女の子が駄々をこねている相手はそこその体格を持つ、ロング

コートの男性だった。

「うるせえ！ 今からお前向けの仕事を取ってきてやるから、ココを動くんじゃねーぞ？」

そう言うのと、男性は女の子を残して行ってしまった。

「あらあら。こんな所に女の子で一人にするなんて。」

「確かに、あまり気分の良い光景では無いな。まあ、不謹慎極まりない話をしていた我々にどうこう言える話では無いかもしれんが。」

と、その時。突然大きな地震が起こる。そして出入り口が徐々に閉まっていく。私と男性キャストは出入り口に近い場所に居た。しかし女の子は大分遠い場所に居る。しかもあろう事か頭を抱えて座り込んでいる。これはマズイと思い、女の子に駆け寄って肩に担ぎ上げて走る。

「ふえ！？ ちょ、あの！」

「あ、暴れないで！ って、うわあ！？」

女の子が暴れた拍子に床のデコボコに躓いて転んでしまった。お陰で扉が閉まるまでに外に出る事が出来なかった。むっくりと起き上がりながら女の子に話しかける。

「いったい……なんで暴れたの？」

「だ、だって……」

そう言って顔を赤くしながらもじもじと裾の方を若干引っ張っている。

あ、なるほど。そういえば慌ててたせいで担ぎやすさ重視のお尻が前に来るスタイルで担いでいた。これはつまり、扉の辺りに居た人達から見れば「おパンツですよ！ 少女のおパンツですよ！」と言わんばかりのスタイルになってしまっていたわけだ。

淑女たるものそこまでキツチリ考えて動かないとね。いやあ反省反省。

「あらあら、ごめんなさいね？」 あ、私はリア・ゲート。あなたのお名前は？」

「え、エミリア。エミリア・パーシバル。って言うか、今のこの状

況って・・・」

「ええ。閉じ込められちゃったって状況ね。まあ扉は開かないモノと割り切りましょう。」

「割り切って・・・で、どうするの？」

お尻を無意識にぱんぱんとはたきながら立ち上がり、言った。

「先に進んでみましょう？　もしかしたら、別の出口から出られるかもしれないもの。」

「え、ええ！？　先に進むの！？　あ、危なくない？」

「ん、そうねえ。きつと危ないでしょうねえ。ま、でも、死んでしまったその時はその時、所詮はそこまでの命だったって事で、良いんじゃないかしら？　それに・・・」

そこまで言って、愛銃のショットガン、違法改造が施されたシツガ・デスタをナノトランスさせて手元に呼び出し、それを右手だけで持ってエミリアの頭に突き付ける。

「伏せなさい！」

「ひうっ！？」

エミリアが頭を下げると同時に引き金を引く。後ろに居たエビルシャークの上半身がアゴと腕のを残してバラバラに吹き飛ぶ。

撃った反動を利用して銃を手元に引き寄せて左手でポンプアクションを行い、エミリアが居る側の反対から、私目掛けて飛び掛ってきたエビルシャークに向かって再び発砲する。

上半身と下半身が強力な力で無理矢理捻じ切られたソフトビニール人形のようにいびつに千切れて分かれ、吹き飛ぶ。

「す、すご・・・。」

「ここはもう安全地帯じゃ無いのよ？　ここに留まっていると、こういう品の無い方々がわざわざ来る可能性も高いの。だから少なくとも、移動は行うべきだと思うわよ？」

「う、うん。分かった。って言うか、あんたと一緒に居る事にするから！」

「あら？」

「だって、あんたと一緒なら何とかかなりそうだし！」

「あらあら。それじゃ、張り切って行きましようか。」

「ん、多いわね。ちょっと疲れて来ちゃったわ。この子もそろそろメンテナンスしたいし・・・。」

連続で既に50体近くを討伐している。いい加減に疲れて来たし、それにシッガ・デスタの銃身も焼けて来た。そろそろメンテナンスが必要そうだ。

と、エミリアが不思議そうな顔で質問をしてくる。

「あれ、シッガ・デスタ・・・っていうかテノラの製品って耐久力が高い事がウリじゃなかったっけ？」

「あらあらく知ってるのね？ そうなのだけど、この子は私がアレンジを加えてあげた特製だから、耐久力が著しく低くなっちゃってるのよ。その代わり、普通のシッガ・デスタなら片手撃ちなんてしたら肩が外れちゃうけど、この子なら多少は平気だし、破壊力は・・・まあお察しの通り高いしね。」

「ふん。ねえねえ、ちょっと貸して？」

「良いわよ。はい、どうぞ。」

周囲に目を軽く走らせながらエミリアに渡す。

手に取り、隅々まで観察するエミリア。その眼はまるで、他社の武装の研究を行っている技術者のように鋭くそれでいて好奇心に溢れている。

「ふん、なるほどなるほど。緩衝装置の全長を伸ばして反動を小さくしつつ、広がったリアクターのスペースにもう一つ、ハンドガン系のリアクターを積んだのね。どうりで長く見えたワケだ。なるほど、これなら威力も上がるし反動も小さくなるね。でもコレ、作りが荒いよ。これじゃあ折角のフレーム剛性が台無しじゃない？ それに、この銃身材って軽さを基準に選んだでしょ？ これって熱

に弱いから銃身材には向いてないよ？」

それを聞いて悔しさ半分に少しイジワルを言う。

「あらあら。じゃあ今度、エミリアに改良をお願いしようかしら？」

「え、あ、いや！ 無理無理！ あたしのは知ったかだし！」

無理！ 絶対無理！ と連呼しながら私にシツガ・デスタを返そうとこちらに来るエミリア。と、ここでエミリアを左手で突き飛ばして半歩下がる。私が居た所とエミリアが居たところの丁度重なる辺りに、亀のような形の変な外見のスタティリアの一種がこちらに向けて砲弾のような物を撃ってきた所だった。

私は仕方なく右手を変化させてブリンガーライフルにして構え、撃ちこむ。しかし射撃に耐性があるらしく、効果は薄そうだ。しかし、それでも数を撃ち込めば話は別だ。無数の黒いエネルギー弾にとうとう装甲を貫かれ、蜂の巣になるスタティリア。尻餅を付いているエミリアに駆け寄って声を掛ける。

「大丈夫だった？」

「う、うん。平気だけど、その銃は？ 今、ナノトランスしないで出したように見えただけど・・・？」

「え？ あ、いやあ気のせいじゃないかしら？ ちゃんとナノトランスしたわよ？」

「いや、でもこう、ニュッって・・・」

「いやいやいやいや、気のせいよ気のせい！ さ、早く立って！ 行きましょう？」

「それにしても、なんでレリクスなんてあるのかしらねえ？ ねえエミリア？」

話が途切れたので苦し紛れに強引にエミリアに話を振る。

「うーん、それには諸説あるらしいんだよね。ともかく旧文明が存

在してた事は間違い無いとして、何故旧文明人はどうしてレリクスみたいな建造物を作ったのか、なんだけど・・・旧文明人が生きた時代にもSEEDの襲来があって、身を守る為に建造したっていう説が多分一番代表的なんじゃないかな。確かにこの説は信憑性が高いんだけど、でも矛盾点もあるんだよね。まず第一に、既にSEEDは封印されて全滅してるハズなのに、何故こうして新たに起動したレリクスが有るのかって事。次に、対SEEDの為ならどうしてSEEDの襲来と共に一斉に起動しなかったのか。有る程度の間を置いて、それぞれがそれぞれのトリガーに合わせて順次起動していったとすると、単純に対SEED用とは考え難いんだよね。他にも、色々あって・・・あ。」

私がポカンとして聞き入っている事に気付き。硬直するエミリア。私はそんなエミリアを目を丸くして見つめながら、素直な感想を述べる。

「詳しいのね。びっくりしたわ・・・。」

エミリアが若干慌てた表情で言う。

「え!？ あ、いや、常識よ、常識！ 傭兵ならこの位知って当たり前なの!」

「あらあら、じゃあ私はニワカなのかしら?」

「う、うううう・・・。」

エミリアが不機嫌そうな顔をする。

「も、もう! ほら、さっさと行こう! 早く出口見つけて、早く外に出て、早くあのおっさんに文句言いまくってやるんだから!」

「おっさん? って、あのロングコートの?」

「あれ、知ってるの?」

「うーん、詳しくは分からないわ。エミリアが駄々をこねていた相手でしょう? その程度。」

「え、まさかさっきの見た?」

「ええ、ばっちり。「いやだ、帰りたいよ!」って駄々をこねている所の一部始終。」

ほぼ完璧な声真似に自画自賛したくなる気持ちを乗せてエミリアにどや顔を見せ付ける。何故か少し落ち込んだ表情をするエミリア。表情豊かでカワイイ子ねえ。

「うう、見られてたんだ・・・あのおっさん、あたしが働かないからって無理矢理軍事会社なんかに入れて、しかもいきなりこんなレリクスにほっぽって！ あゝ、もう！ 何かむしように腹が立ってきた！ ねえ、こんなか弱い女の子をレリクスに放り出すなんて酷いと思わない？」

「そうね、確かにちよつと厳しいわね。」

「そうだよ！ そりゃああたしも仕事を選び好みして全然やらなかったけど、これは流石に酷いよね！」

「んゝ、選り好みするのはともかく、全然働かないのは問題じゃないかしらゝ？」

「えゝ？ 何、もしかしてあんたもおっさんの味方ゝ？」

「そんな事は無いわよゝ？ ただ、ちよつとエミリアに同情の余地が少ない気がただけ。まあ、ここから脱出して、言いたいだけ文句を言えば良いんじゃないかしらゝ？」

「ぶゝ、なんか誤魔化された気がするゝ！ ま、それもそうだよ。ね。よゝっし、絶対にこっから脱出するぞー！ おー！・・・って事で、よろしく！」

「・・・あんまり、人に頼り過ぎるのは良くないと思うわよゝ？」

「ここは・・・」

大きな通路のようなスペースに出た。両側にはズラリと大きな騎士のような形の物体が。何だか微妙に荘厳な雰囲気思わず立ち止まってしまう。

「こ、これ全部、人型の大型機動兵器だよ？ タダでさえコッチ見えて怖いのに、動き出したらって考えると・・・うう、早く行こう

よ……。」

エミリアが後ろに隠れるようにすがり付いてくる。背後のエミリアを見て、思わず顔が綻んでしまった。

もし、自分にこの位の子供が自分に居たらきつとこんな感じなんだろうな、なんて考えてしまつて。

と、エミリアの側からは反対側、私から見れば前の方から大きな駆動音がした。振り向くと、こちらを向いて武器を片手に吼えている。威嚇のつもりだろうか。エミリアが慌てた声で言う。

「ちょ、ちよつとちよつと！ 言つたそばから動き出さないでよ！ 私は左腕でエミリアを制する形を取り、エミリアに言う。」

「少し下がってなさい。」

「え！？ む、無茶だよ！ あんなデツカイの相手に一人なんて！ エミリアの方に目を向け、少し強く言う。」

「じゃあ、手伝ってくれるの？ いえ、あなたに私を手伝える？」

「う、そ、それは……」

「なら下がって。大丈夫、あの程度ならいくら出て来ても負けないわよ。」

エミリアが悔しそうに唸り、そして言う。

「わ、分かったわよ！ あんたのその大丈夫って言葉、信じるからね！」

「ええ、信じて待つて。」

そう言つて、目の前まで近付いていた巨体の機械騎士と対峙する。

大斧を横に構える。それを見て高くジャンプする。足元を一撃必殺の破壊が通り過ぎる。私は空中で機械騎士の頭にショットガンの照準を合わせ、抜群の破壊力を持つ銃弾を撃ちこむ。しかし、

「あらあら、硬い子ね？」

確かに少しだけ装甲が剥げた。しかし停止にはほど遠い。これは装甲部分に撃ちこんでも大したダメージにはなりそうもない。それならと着地と同時に横っ飛びに斧の大きな縦振りをかわして脇腹辺

しかし、私は倒れない。それ所か、血の一滴すら出ない。削がれ、宙を舞った左側頭部がべちゃりと汚らしい音を立てて地面に落着し、その場で黒い粒子となって霧散する。

それは撃破されたSEEDフォームのそれと良く似ていた。

私の中から、今まで私の形として丸め込んでいた物が、黒い液体のように左側頭部から溢れ出す。

それは私の左半身、特に左腕を瞬く間に覆い、影のようにも見える真っ黒いそれは瞬く間に大きくなり、それらを螺旋状に隠すようにして、緑色の点滅する点が規則正しく並ぶ紫色の帯のような物が覆い、それは最終的に太く、禍々しい、巨大な蔓とその先端に蕾のような形の膨らみのある触手のような物となった。

私はそれを大きく振り、真横から機械騎士に叩き付ける。機械騎士は上半身だけがちぎれるようにして壁に叩き付けられ、粉碎し、その場には支えるべき上半身を失った下半身だけが残っていた。

エミリアが驚愕と恐怖を顔いっぱいに表示した表情でこちらを見る。私は左腕の触手を大きく振るう。エミリアが体を小さくするが、勿論エミリアを狙ってはいない。

エミリアを後ろから狙っていたやつを叩き潰したのだ。エミリアが恐る恐ると言った感じで顔を上げ、そしてこちらを見ると同時に叫ぶ。

「う、後ろお!!!」

その瞬間、後ろを振り返るが間に合わず、胸に深々と大斧が挟りこみ、地面に叩き付けられてから完全に背中に通す。その後も一機が現れ、二機で私をメチャクチャに叩き潰しまくる。末端が幾ら破壊されても平気とはいえ、そのメチャクチャな斧の中には核に致命傷を与えるような一撃も当然のようにあったワケで、私の意識が段々と薄れていく。

私が動かなくなったのを確認したのか、二機の機械騎士はエミリアにゆっくりと歩を進める。私はギリギリで動く首でエミリアの方を見る。

エミリアの後方からはさらにもう一機が近付いている。私は渾身の力を振り絞り、体の大きく開いた傷口から左腕と同様の触手、しかしサイズは少し劣る触手を十本ほど飛び出させて私をメチャクチャに叩き潰した二機を突き刺し、完全に破壊する。しかしそこで力尽きてしまう。体から飛び出させた触手が黒い粒子となって霧散する。私は薄れていく意識の中で必死に口を動かす。しかし動いてるかどうかも分からないし、そもそも声が出ていない気さえする。目も一応開けているつもりだが、他人から見れば閉じているかもしれない。

私の口の動きに気付いたのか、それとも本能かは分からないが、エミリアが私に走り寄る音が聞こえる。そして何か・・・恐らくはエミリアに揺さぶられる。一揺れ、二揺れと段々と意識が薄くなっていく。

「どうして・・・どうしてあたしなんか庇って・・・ねえ、ねえ起きて、起きてよ！ どうして・・・？ どうしてみんなあたしを置いてっちゃうの・・・？ お願いだから、目を開けてよお・・・あたしを・・・一人にしないでよお！！」

その瞬間、不思議な物を見たような気がした。エミリアの顔に浮かぶ回路のようなオレンジ色の線、エミリアの背後に浮かぶ円のような物。そして・・・

「あなたを・・・死なせはしません！」

・・・・・・女神？

第一話「死にたいわけじゃない。」（後書き）

はい、ようやくとプロローグ終了です！ 長いね！ まあ原作がこうだから仕方ない！ で、ネタばらしをしますと、主人公は元人間の人型SEEDです。まあ過去のお話とかは次回があれば追々という事で。ではでは。

第二話「だけど生きてちゃいけないんだよ。」（前書き）

リアちゃんの口調が乱れますが、仕様です。ええ、仕様ですとも。
では第二話、ごゆっくりとお楽しみくださいな。

第二話「だけど生きてちゃいけないんだよ。」

「・・・ん・・・」

なんだか妙に眩しい。なんだ、地獄っていうのも案外にも明るい物なんだなあ。そう思いながら目を開ける。

目の前にグラマラスなスタイル拔群のひ・・・キャストが居た。

「アラ、おっきたネエ。チョット待っててネ？」

そう言っただけでキャストの女性が奥の方を向いて誰かを大きな声で呼んでいる。

私はその間、周囲を見渡す。派手さの無い質素な、良くある作りの、随分と小奇麗な・・・事務所？ 何か。何より地獄の割りに明るいし、天国に私が来れるとは到底思えない。

と、言う事は・・・生きてる？ いや、それは考え辛い。だってあの時、私は核に致命的なダメージを受けたし、そうじゃなくても形状を保存しておけない程までに全身にダメージを受けていた。「中身」丸出しならいくらでも生きていられるけれど、それにしてもキャストの対応が普通過ぎる。

人類種の天敵を目の前にしたら普通はもう少し慌てたりしそうなモノだけど。と、言う事は姿形に関してはちゃんと人間のフリができてる？ それにしてもミシなオイしソウ・・・

ハッと気付いて左目を押さえる。眼帯、もといヘッドマウントディスプレイが無い。慌ててタオルをナノトランスさせて取り出し、左目が隠れるように押さえ、簡単な眼帯の代わりにする。

応急処置だが仕方が無い。後でどうにかしてライアさんに連絡を取ってまた作ってもらおうとしよう。頭の後ろでしっかりと縛り、ズレない事を確認すると近付いてくる足音に気が付く。

「よう。ようやくお目覚めか？」

「あ、はい。お陰さまで。」

そう言っただけで声を掛けて来た男の方を見る。背の高いビースト。色

のセンスがイマイチなロングコート。ボサボサの髪とヒゲのせいで、顔が鼻と頬ぐらいしか見えていない。

胸元を大きく開けており、そこにはぶ厚い胸板が。少しむさ過ぎる。年も相当行っただし、あまりタイプじゃないかな。オイシソウダケド。

「？ どうした、そんなにジロジロ見て？」

「い、いえ。何でも・・・あ、それより女の子を知りませんか？」

「あ？ 女の子だあ？」

「こう、金髪で、赤い目の・・・」

「金髪で赤い目？ あゝ、アイツか。今呼んだ所だ。そろそろ来んだろ。」

と、後ろのドアが開いた音がした。それと同時に何だか落ち込んだような女の子の声が聞こえてきた。

「うゝ、おっさん、今日くらいはかんべんしてよねゝ・・・あたしがどんな目にあったか知ってるでしょゝ・・・」

「知らねゝし、興味もねゝからかんべんしねゝよ。ったく、客の前でそんな顔すんじゃないよ、みっともねえ。」

女の子が不満そうな顔でおっさんと呼んだビーストの男を軽く睨んでからこちらを向く。

「えっと、初めまして。って、どっかで会ったような・・・？」

その女の子を見て、私も驚く。

「エミリア・・・！ 良かったゝ、無事だったのねゝ？」

「あ、あんた・・・どうして生きてるの！？ ねえ、何で！？ 何で、おっさん！？」

「あら心外。何だか生きてちゃいけないみたいな言い方ねゝ。」

「人を勝手に殺してんじゃないやねゝよバカ！」

おっさんに罵られても特に意に介する風も無く、

「良かったゝ、ホントに良かったゝ。アレで死なれてたら一生モンのトラウマだよゝ。良かったゝ。そうだよね、あそこで起きた事って全部夢だったんだよね、良かったゝ・・・。」

何度も「良かった」を繰り返して安堵するエミリアそれを見ておっさんが小声で

「よしよし、狙い通りエミリアも良い感じに懐いてるな・・・」
と言った後、こちらを向いて手を肩に掛けて少し顔を近づけて言う。お酒臭い。

「お前さん、フリーなんだろ？ 丁度良い、このままウチの会社に入っちゃえ。今なら住む場所と居ないよりはマシ程度のパートナーも付けてやるぜ？ どうせ身寄りもねーんだろ？ ウチは働きの良い社員にはボーナスもはずむぜ？ どうだ、このご時世乗らねー手はねーだろ？」

「へー、パートナーまで付けるなんておっさんも珍しく太っ腹だね。」

意外な一面を垣間見て関心したような表情のエミリアに、おっさんが肩越しに呆れたような目線を投げ付ける。

「何他人事みたいな顔してんだ。お前の事に決まってるんだろ。」

そう言うと共にこちらに向き直り、口角を少し引き上げて若干黄ばんだ歯を見せながら私に聞いてくる。

「で、どうする？」

「ちよ、おっさん！ あたしにも選ぶ権利を・・・」

「義務も果たせねーようなバカに権利なんざねーんだよ！ で、どうする？」

正直、かなり悩む。確かに一人で動くのはいい加減にキツくなってきた。常に食べ物に困る生活はもう嫌だ。

しかし正真正銘の「おばけ」が果たしてヒトの集団の中で生きられるのだろうか？ 正直、正体を明かさずに輪に入って正体を明かした時の反動が怖いし、それならばと正体を明かしても、当然の如くに弾かれるのがオチだ。なら、やっぱり・・・

「ええと、嬉しいんですけど、お断りさせて・・・」

「おおそうか。いや、しかな。ウチも慈善事業をやってるわけじやねーんだ。」

「へ？」

電卓をポケットから取り出して、何やらポチポチと打ち込み始める。

「ええと？　ココまで運ぶ運搬代金と、メデイカルチェックの費用、そんで起きるまでの護衛代金、コイツに人件費と燃料代と手数料を併せると・・・ま、ざっとこんなモンだな。」

電卓を突きつけてくる。と、それを見た時に、やっぱり人類が嫌いになりそうになった。

「ご、五百万メセタって・・・」

「即金で払えるか？」

「これだから人類は・・・（ブツブツ）」

「ああ？　なんか言ったか？　で、払えるのかどうなんだ？」

「払えませんか！　こんなの平均的なサラリーマンの年収から税金を引かなかった額と同じぐらいじゃないですか！」

「払えねえだあ？　しかし払ってもらわねけりゃコッチも困るんだよね？」

「ぐぐぐ・・・」

食い殺してやろうか。本気でそう思った。しかし今そんな事をしたら今の今まで平和的に過ごして来たのが全て泡と弾けてしまう。殺意をグツと飲み込んで、今取れる最善の選択を取る。

「分かりましたよ・・・。」

「よし、決まりだな。既にお前のマイルームは用意してあったから。」

おい、エミリア。コイツを部屋まで案内してやれ。」

「なんであたしが・・・」

「何か言ったかゴクツブシ？」

「なんでも無いですー！　はあ。じゃ、あたし居住区の入り口の前に居るから。」

そう言って出て行くエミリア。

「親子仲、悪いんですね？」

「はあ？　親子？　誰と誰がだよ？」

「おっさんとエミリア。」

「おっさんってなあお前・・・そういや自己紹介して無かったな。俺はクラウチ・ミューラー。お前は？」

「リア・ゲートです。」

「ワタシはチェルシー！ ヨロシクネ！」

「あ、はい。よろしく願います。」

「おうチェルシー、どさくさ紛れに自己紹介たあ流石に抜け目ねえな。で、書類は？」

「モチロン持ってきたヨ！」

そう言ってチェルシーが私に書類を差し出す。

「ココと、ココに署名、お願いネ。本人直筆のサインじゃなきゃ無効扱いにされちゃうからね。」

「はい。」

そう言って指定された場所にサラサラっと書く。本人直筆、かあ。既にリア・ゲートって名乗って良いのか分からないぐらいになっちゃってるけど、それでも本人で良いのかな。

そう思いながらも一箇所にも名前を書く。

「はい、できました。」

「ウン、コレでオッケーネ。これカラもヨロシクネ？」

「はい、よろしくおねがいます。さてと、それではこれで。」
そう言ってその場を後にする。

「ふあゝあ・・・ねむ。あ、やっと来た！」

「あらあら、待たせちゃってごめんなさいね？」

「まったくもう！ ま、良いや。とりあえず部屋まで案内するからついて来て？」

そう言って歩き出すエミリア。レリクスの時もそうだったけれど、

こうして改めてみると本当に普通の子供にしか見えない。そういえばあの女神は一体何だったのだろうか？

思えばかなりキワドイ服装をしていたようにも思える。とはいえ、きつとあのレリクスでの出来事は夢だったのだろう。そうに違いはない。でなければあんなに理想的な死に時がるハズが無い。そんな事を考えていると、エミリアがとある一室のドアを開ける。

「ここが、あんたの部屋。で、あたしの駆け込み部屋！」

「あら、今まで嫌なことがあったらここに駆け込んだの？」

「ううん、どうせあんた一人でしょ？ 何かあったら入れさせて貰うから！」

「ええ……。」

別に構わないが、それにしても……。

「本当に普通のお部屋ね……何があっても無いし……むしろ落ち着かないわ。」

「あ、それならインテリアショップに行けば？ テーブルとか箱とか色々あるよ？ 勿論リフォームチケットもね！」

「ん……私、お金が無いのよね……。」

「え？もしかして……？」

「ええ、一文無し。そもそもあのレリクス調査に参加した目的だって携帯食料が主な理由だったし……。」

「あ、あはは……フリーの傭兵ってのも大変なんだね……。」

「まあ私の場合、身元が戸籍から出生届から根こそぎ無くなってるのもお仕事が取れない原因だったりするんだけどね。」

「ふん。」

そうだけ言うと、エミリアが目をショボショボさせながらベッドに腰掛ける。

「あゝ、駄目だ。ホントに眠い……。」

そう言うと共に全身から力が抜けて、糸の切れた人形のようにベッドに倒れこむエミリア。部屋を軽く見回しながらエミリアの傍に腰を掛ける。

フツと思いついて、右手をブリンガーライフルの変異させる。どうやら体の方に異常は無いようだ。右手を戻すと、エミリアの寝顔を軽く観察する。

こうまじまじと見ると、一応は同性の私も少しドキツとしてしまう程度に可愛い。スヤスヤと寝息を立てて、ほんとウにカawaiiらしい。まったくホントウにオイシソウ・・・・・。

ハツとなって頭を振り、自分の頭の中の思考を掻き消す。とりあえず手元にはまだ300メセタほど残っていた筈だ。飲み物でも買って来て落着こう。

腰を上げてドアから外に出ようとする。その時だった。

「待って。」

後ろから、つい最近聞いた気がする女性の声が聞こえた気がしたのは。

「ここなら・・・二人で話が出来そうだから・・・。」

さっきまでベッドで寝ていたハズのエミリアが、おぼつかない足取りで部屋の真ん中に立っていた。そしていつか見た、あのオレンジ色のような金色のような回路がエミリアの全身に走る。

そしてエミリアの体から出た金色の光が一箇所に集まり、そこに女の人が現れた。

見惚れるほど美しい人だった。

流れるような金色の長い髪。

文句の付けようの無い抜群のスタイル。

その均整の取れたスタイルを見せ付けるかのように露出度の高い服装。

そして優しさを秘めた金色の瞳。

何処を取っても私より女性的で美しい女性だった。

が、何かおかしい。

この人、そこに居ないように見える。

もっとも、物理的にエミリアの体の中にこの身長の人が入っていないわけが無いのだから、立体映像的な何かと考えるのが道理だ

ろう。

生体をナノトランスしたと言うのなら、ハンディサイズのトランサーで生き物が生きたままにナノトランスできている事に疑問があるが。

と、その少し変な女性が語り始める。

「私はミカ。訳あってこの子に宿る、意識のみの存在です。この姿も、状態も、すでに失われた古の技術によるもの。失われた技術を旧文明のものと言うのなら、私は「旧文明人」となりますね。」

話がいきなり突拍子も無さ過ぎてどうにも言葉が見付からず、呆然とする。そしてミカが、旧文明に起こったSEEDの襲来と、その旧文明が計画し、実行に移した「復活計画」に関して話し始めた。

大まかに話し終えると、ミカがこちらを見据えて、頭を下げる。

「どうか、この忌わしい計画を阻止するために、手を貸していただけないでしょうか？ この子は・・・心を閉ざしきっていて、私の声を認識してくれないのです。」

「でも、あなただって旧文明人でしょう？ なら、何故阻止しようとするんです？」

「確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰を望んではいません。私達は滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです。」

「そう言って一息付いてから、ミカが先ほどまでよりも、より一層深刻な顔をして、語り始める。

「・・・それに、貴方にとっては既に私の存在は他人事ではないのです。・・・何故、縁のないはずの私と貴方が話すことができるのでしょうか・・・？ そしてあのレリクスで自律機動兵器に襲われたのは、本当に夢だったのでしょうか・・・？」

その時点で、嫌な予感が胸を過ぎる。と、確信的な一言を、ミカが言い放つ。

「・・・貴方は、生きていたのでしょいか？」

私はその一言を聞くと同時に、ミカに掴みかかった。しかし実体は無く、手は空を掴むばかりだった。両手を握り、歯を食いしばり、普段では有り得ないほどに語気を荒げる。

「何で私を生き返した！！？ あのまま死ねばようやくこの太陽系から最後のSEEDフォームが消えたハズなのにッ！！！！ あのまま死ねば私はまだリア・ゲートとして死ねたハズなのにッ！！！！ 一人の「人間」として死ねたハズなのに！！！！！」

「ッ！」

「どうして・・・どうして私を死なせてくれなかったんだッ！！！！ SEEDフォームなのはアンタだってすぐに分かったハズだ！！！」

！！ 私の身体は・・・私の身体はもう、戻れないんだ・・・・・・。

」

その場に俯き、へたり込む。歯を食いしばって、拳を握り締めて。夢であって欲しかった。あのまま死にたかった。あれ以上の死に時間なんて、もう二度と無いだろう。

後はもう・・・また精神を侵されて、人を襲う単なるSEEDフォームに逆戻りして、その時の英雄に討たれるしか、もう無いのだろう。

「何で・・・どうして・・・・・・」

涙は出ない。もう涙腺が無いから。鼻水も出ない。鼻はあるが、これは「リア・ゲートの顔」を再現する為の形だけのパーツであり、装飾品だから。

ミカは言葉が見付からないらしく、ただ、申し訳なさそうに斜め下に視線を落としている。

「・・・ふぁ・・・・。」

エミリアが寝返りをうつつを見て、ミカと私は同時にハッとする。と、同時にミカが少し慌てた様子を見せる。

「そろそろこの子が目を覚まします。詳しくはまたいずれ・・・。」
そう言って消えるミカ。と、エミリアが目を覚ましそうになるのと同時に、部屋の真ん中でへたり込んでいるのは流石に変だろうと思ひ、慌ててベッドの上で横になっているエミリアの隣に腰を掛ける。

「・・・ふあ、あつ。んー、ちょっと寝ちゃった、かな?・・・ん? あの子、なんでこっち見つめてるの?」

「へ!?! え、ええと・・・あ、寝顔を見てたのよ! 可愛いな〜って思っ〜。」

「ちよっ・・・! 寝てるのに気付いてたんなら起こしてよ!」

「ん〜、あんまり可愛い寝顔だったから〜♪」

「あーもう、恥ずかし・・・」

そう言って少し目線を外すエミリア。内心冷や汗ダクダクだったのだが、汗腺も無いお陰でどうにか誤魔化しきれたようだった。

第二話「だけど生きてちゃいけないんだよ。」（後書き）

へーい、第二話ですだよだぜー！　もう第一話から二ヶ月と半月ぐらいが過ぎてようやと第二話とかマジ遅すぎっすよね。すいません。まあサブ何で、そんなモンです。まあ実際の所を言うと、感想を頂いたのが嬉し過ぎて、執筆ハイブースタが掛かって止まらなくなるっちゃったのが原因なんですがね。ってな感じでまた次回！

これ、完結まで相当掛かるよなあ・・・。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（前書き）

リアちゃんの知っている情報は大体三年前ぐらいから止まっています。でもパルムで生活していたので一部情報は一応知っています。その内昔話とかしっかり書けたら良いなッ！

第三話「それでも私は幸せでいたい。」

次はマイシップに案内すると言うエミリアを一旦部屋から追い出して、ライアさんに連絡を取る。

何でもライアさんはどこかのエライ人らしいのだが、詳しくは知らない。

知り合ったのは偶然にも病室のベッドが隣り合わせだった事からだ。バイクで事故を起こしたとかで、立派な体格のやたら威厳のあるビーストやらキャスト、華奢で上品なニューマンやパリッとした正装のヒューマンなんかが続日見舞いに来ていた。しかも全員やたらと低姿勢だったのが印象的だった。

隣のベッドで精神病患者さながらにロープでベッドに拘束されていた私に向こうから話し掛けてきた時は驚いたものだ。少ししてすぐに打ち解けたのだが、その頃にはライアさんは先に退院してしまった。しかし時折お見舞いに来てくれて、しかも無料で特注の「凄いい眼帯」を作ってくれた。

ライアさん曰く、「壊れたらまたいつでも新しいのを用意してやるよ!」との事だった。そのお返しに、私はライアさんがお仕事で疲れた時なんか一緒に街に繰り出して遊んでいる。

何でも立場上、仕事仲間とかは遊び等には誘い難いらしい。とはいえ、亜空間航行の実験やら何やらでライアさんの所もこの所は忙しいらしく、最近は随分とご無沙汰なのだが。

ライアさんに教えてもらった個人回線の番号に掛ける。そういえば、このビジフォンから掛けるの初めてだな。でもきっと個人回線に掛かってきたら出てくれる人だろう。

『誰だ?』

ほらね。

「あ、ライアさん。お久しぶりです。」

『おおリア! 久しぶりだねー元気してたかい?』

「はい、お陰さまで。聞いてくださいライアさん！ 私、ついに職に就けたんですよ！」

『おお、やったじゃないか！　じゃ、何かお祝いにプレゼントとか用意しないとな。』

「あ、それでしたらあの、頼みたい事がありました。」

『頼みたいこと？　・・・ああ、眼帯の修理とかかい？』

「いえ、完全に壊れてしまったので新調してもらいたくて。お願い、できますか？」

『ああ、分かった。で、何か追加したい機能とかはあるか？』

「うーんと・・・サーマルスコップと撮影機能、ですかね。」

『撮影？　なんだ、お前が着いた職業って情報屋か何か？』

「いえ、折角腰を据えて仕事が出来るんですし、仕事仲間との思い出とかを写真にしたいなと思ってます。」

『なるほど、な。分かった。技術部の連中に伝えとく。』

「あ、あともっと頑丈にしてください。」

『具体的には？』

「んーと・・・真正面からの艦砲射撃に耐えられるくらいで。」

『ハハハッ！　そりやまた面白い注文だ！　分かった、限界まで頑丈に作るよう言っておくよ。じゃ、いつ頃になるかは後で追って連絡する。じゃ、またな。』

「ええ、また。お体に気を付けてくださいね、ライアさん。」

『ああ、お前もな、リア。』

通信を終えてビジフォンをシャットダウンする。それから部屋の倉庫の手前の方に仕舞われていたパートナーマシナリーを起動して、基本設定を済ませる。

これで部屋に戻って来た時にはエミリアが乱して行ったベッドメイキングも完璧にしておいてくれる事だろう。

もし上手く行ってなくてもその程度のポンコツであると認識しておけばそれ以降は過度な期待をしなくても済む。

起動準備に入っているパートナーマシナリーを置いて、先に行か

せていたエミリアに合流する事にした。

「あ、やっと来た。じゃ、次はマイシップの説明をするからね。」
そう言ってまるでメモを暗唱して来たかのように業務報告と言った感じで淡々と説明される。その手際の良さは何度もこう言った経験をして体で覚えているのではと思わせる程だった。

転送装置からマイシップ内に入る。その瞬間、私は思い切り目を見開いて驚く。

「モデル9999（フォースサイン）！？ うそ、何でこんな高いのが・・・」

そう。この社用として使われている船は各惑星の要人や金持ちが使っているような超高級モデルなのだ。

確かにこれならば三惑星間を休む事無く2400時間飛び続いても壊れる心配も無いだろうし、ワープゲートを使わなくても別の惑星までほんの数時間で到着できるだろう。

しかしここで疑問が湧く。

「・・・何で社用の船はこんなに立派なのに、事務所は普通なのかしら？」

「あゝ・・・この船今は社用として使ってるけど、元々はリトルウイングの社長のウルスラさんが個人で所有してた物らしくって。リトルウイングを創設した後になって社用船が無い事に気付いて、仕方なく個人用の船をいくつか社用にしたらんだったさ。」

「なるほど・・・そのウルスラって人、相当儲けてるわね。」
「まあ、ウルスラさんだしね・・・。」

そう言って少しだけ遠い目をしていたエミリアが、一つ可愛らしい咳払いをしてからまた説明を始める。

私はそれを適度に聞き流しながら船内の隅々に目を這い蹲らせる。

非常に綺麗に整備されているのでパツと見では分からないが、これはかなり使い込まれている。モデル9999は金持ちがステータスとして持っている程度の事が多いのでここまで使い込まれている物は非常に珍しい。

そしてメインコックピットを細かく見て行つて、驚愕する。

コイツ・・・改造船だ・・・！

法定速度を大幅に超える速度まで示せる競技用船のスピードメーター。更に本来なら設置されていないハズのターボロケットの稼働率を示すメーターまで追加されている。何より通常とはまるで形状の異なるコンソールがこの船全体の恐るべき改造具合を如実に示していた。

「ちよつとー！ 船ばかり見てないであたしの話を聞けー！」

耳元で叫ばれて慌ててエミリアの方を向く。

「あ、ごめんなさいねーエミリアー。ちよつと夢中になっちゃつてゝ。」

「まったく！ あ、そうだ、会社ではあたしの方が先輩なんだから、敬うようにね！」

「あ、はい。よろしくお願い致します。」

「うわ、駄目だ。キモチワルイ。やっぱ今まで通りで良いや。」

「あ、あら？」

そう言つてちよつと困惑していると、エミリアは手近の椅子に座つて全身から力を抜いたようにダラツとする。

「はゝあ、それにしても今日は色んなことが一辺に起きて疲れたゝ・・・。初めての仕事でしょ？ いきなりレリクスに閉じ込められちゃうし、あんたは・・・その・・・」

そう言つて言葉に詰まるエミリア。しかし私を見て少しだけ口角を上げると共に、

「まあ、全部夢よね夢！ うん、白昼夢！ 第一アレで生きてるハズ無いし！ あんたが生きてるって時点で夢確定よね！」

「あらあらゝ、私はエミリアの夢の中ではどんな死に方をしたのか

しら？」

そう言いつつ、エミリアの座っている椅子の肘掛に腰を下ろす。

「う、それはあんまり・・・でもまあ、その・・・あたしが言った事を・・・その・・・信じてくれたのは・・・嬉しかった、かな・・・ま、夢だけどさ。」

その俯きながら恥ずかしそうに言うさまが余りにも可愛らしく、私はエミリアの頬っぺたを突付きながらも凄く笑顔になる。

「エミリアったら可愛いこと言っちゃって♪食べちゃいたくなるわね♪」

「え！？あ、まさかソツチ系の・・・」

「言葉の綾よく♪可愛い♪」

「むー！ と、ともかく！ あんたのこと色々教えてよ！」

そう言うと共に跳ね上がるようにして椅子から立ち上がるエミリア。立ち上がってから半回転してこちらを向くと、人差し指を私の鼻に突きつけて言う。

「わたし達、パートナーなんだから！」

「でもヒトに指差すのは止めておきなさいよ？」

「う・・・はい。」

私は完璧にSEEDだった。いや、人として生活はしていても結局、今でも私の身体はSEEDフォームである事には間違いは無いのだが。

それでも、自己を認識する上で私はヒトであるよりSEEDであると認識していた時期があった。今ではすっかりヒトを取り戻しているが、それでもやっぱり身体の方はSEEDのままだ。

それがどうしようも無く悲しく、どうしようもなく虚しい。

結局、私はどちらなのだろうか？

私はヒトなのだろうか？

一月も飲まず食わず眠らずで居られるヒトなんて私は電源を落としたキャストぐらいしか知らない。

私はSEEDなのだろうか？

SEEDウィルスを自発的に散布しないように務めるSEEDフォームなんて聞いた事が無い。かのヘルガ・ノイマンですら他のヒトにSEEDウィルスを植え付けて散布していたのだから。

私はヒトなのだろうか？

身体を変異させ、SEEDフォームを産み出す事で無限に近い戦力をその身から搾り出す事の出来るヒトなんて有り得るハズが無い。

私はSEEDなのだろうか？

ヒトを庇って死ぬ事を望むSEEDフォームなんて有り得るのだろうか？ ヒトを大事に思うだけの心を持ったSEEDフォームなんて有り得るのだろうか？

私はどちらなのだろうか？

心はヒトであると信じたい。

だが身体がSEEDである事は否定のしようが無い。

私はSEEDとして沢山のヒトを殺した。

その何れもが死んでも仕方ないと言われるほどの最底辺とも言える連中だったとしても、私は本当に沢山のヒトをその手に掛けた。その中には私の両親も含まれている。

両親に関してだけは「子供達」に任せず、自分の手で殺した。頭から硬い金属製の床に向けて叩き付けた。小汚い花を床に咲かせた。私にとっての最高の死に場所は、エミリアを庇ったあの海底レリクスだった。それでも私は生き延びた。いや、生き返らされた。

きっとカミサマと言うヤツが私に天罰を与えたのだろう。ヒトである事を一度諦めて、SEEDと言うバケモノになった事を言い訳に、実の両親すらも手に掛けた私に。

「理想的な死に方はさせない」と。

「もっと苦しんで生きろ」と。

エミリアはどうやらあのレリクスの一件を夢だと思っているらしい。

だからそれが、「夢」から「現実」に変わった時、きっと私の正体を知ると共に私から離れてしまうのだろう。

それは凄く悲しいし、凄く辛いし、凄く苦しいが、仕方の無い事だ。

SEEDフォームと一緒に居たら、いつ汚染されるか分かった物じゃ無いんだから。

むしろ穢れの知らないあの子を犯してしまう前に、自分から離れた方が良いのかも知れないとすら思う。

でも。

でも、もう少しだけ。

もう少しだけ、この暖かい夢を見ている・・・良いでしょう？

「エミリア、そっちは終わったかしら？」

「ま、まだ・・・ってうわぁ!？」

「エミリア!!」

エミリアがヴァーラの一撃を辛うじて避けると、少しみっともない体勢でヴァーラの前から逃げる。

追い討ちを掛けようとしているヴァーラの両腕の手首にあたる部分にフォトンの弾丸を撃ち込む。

痛みで悶えながらもこちらを向いたヴァーラの両目が次の瞬間にはフォトンの弾丸が突き刺さり節穴になる。

悲鳴を上げるべくして開けられた口に更にフォトンの弾丸を撃ち

込まれ、とうとうヴァーラは絶命する。

「うゝん・・・やっぱり200メセタのレンタルブドウキ・ハドじや精度悪いわね・・・。」

「そのレンタルブドウキ・ハドにも劣るあたしの戦力・・・やっぱあたしこの仕事向いてないんだよ・・・。」

精度の低い整備も悪いレンタルされたハンドガンのブドウキ・ハドの照準を微調整していると、エミリアが誰が見ても分かるほど落ち込んでいる。

「でもみんな最初はそんな物より？ 英雄イーサン・ウェーバーも同盟軍総司令官フルエン・カーツも最初は素人から始まってるんだから。」

「異議あり！ キャストは最初から基本的な戦闘方法はインストールされてると思います！」

「あらあら？ でもインストールされてる分だけじゃハウツー本読んでヒューマンや何かと変わらないのよ？ 現に我が家に乗り込んできたキャスト共だって・・・。」

そこまで言ってこれ以上はマズイと思い、止める。

「と、ともかく、最初はみんな素人なのよ。諦めるのはもう少し頑張ってからにしましょう？ それに危ない時は助けてあげるから。ね？」

「うゝ・・・はあ、分かったよ。もう少し頑張ってみる・・・。」

照準の調整を終えて、先へ進む。

ここは惑星パルムのラフォン草原。

生え茂る草に寝転びたくなるのは恐らく万人に共通する感覚のハズだ。勿論私も寝転びたいが、仕事で来ているのでそうも言ってもらえない。

今回の仕事はヴァーラの群れの討伐。何でも最近、この辺の農家が飼育しているコルトバがヴァーラの群れに執拗に狙われているらしい。

大した報酬は貰えない物の、危険はそこまで高くは無いのでエミ

リアの実力を見るには丁度良いと思い、この仕事を引き受けた。

エミリアは以前、クノーと言うヒトに戦闘の手解きを受けた事があるらしく、基本はちゃんと出来ていた。基本が出来ていれば本来ならそこまで苦戦する事も無いのだが。

「うげ!？」

エミリアは基礎的な体力がまるで無い。

エミリアの背に飛び付いているポルティの四肢の末端を撃ち抜いて剥がし、数回バウンドしてこちらに転がってきたダルマ状態のポルティの頭部を踏み潰して殺す。

その間にエミリアは正面に居る二匹の内片方を右手のセイバーで切り伏せ、もう片方を数歩下がってハンドガンによる射撃で仕留めていた。

たったそれだけでエミリアは肩で息をしている。戦闘の緊張と言うのも勿論あるのだろうが、それでもこれは致命的な気がする。

「・・・エミリア、帰ったら筋力トレーニングしましょう?」

「えー!」

無事にヴァーラの群れを殲滅した頃には、エミリアは大の字になってそこら辺中に血溜まりの出来た草原に寝転がって居た。

シールドラインのお陰で返り血を浴びてないのでエミリアから出た出血では無いとすぐに分かるが、服が赤いせいでヒトによっては即座に勘違いを起こすレベルで衝撃的な絵だ。

「もう・・・はぁ・・・もうムリ・・・動けない・・・」

そう言って疲労を全身で表現しているエミリアの傍に行く。

「あらあら。それじゃ、よっこいしょと。」

そう言ってエミリアを抱き上げる。思っていた以上に軽くて驚いたが、何よりいきなりお姫様抱っこされたエミリアはかなり困惑している様子だった。

しかしそれでもすぐに慣れたのか、異性では無いのであまり意識せずに済んだのか、直ぐに平静に戻っていた。

「それにしてもリアってほんと何者なの？ 精度とか威力にぶつくさ文句言う割にはヴァーラ一体倒すまでにほんの二秒ぐらいしか経ってなかったし。って言うか、ハンドガン一丁であの数相手にあそこまで立ち回れる？ フツ！。」

「エミリアだって沢山修羅場を潜り抜けていけばすぐにこれぐらいは出来るようになるわよ？ あなたはとってもスジが良いもの。同じ失敗は繰り返さないし、覚えも良いし。」

「そ、そう？ え、えへへ・・・なんか恥ずかしいな・・・。」

「でも基礎体力が低すぎるから、ちゃんと鍛えないといけないけどね。」

「う・・・で、でもその辺もテクニックで・・・！」

「テクニックを使っても体力は使うわよ？」

「むぐぐぐ・・・あ、そう言えばあんたってテクニック使わないよね？ 何で？」

「理由は無いけれど、強いて言うなら銃が好きって事かしら？」
「へ・・・。」

それから他愛ない話をしながら船の場所まで歩いて行った。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（後書き）

第一章、ようやくの終了です。

この後は多分、普通に第二章が始まります。

これからも大体一章三話ぐらいに纏めれたら幸せだなあ・・・。

そうすれば大体、三十話目くらいでラストですからね。まあ色々
脇にブレまくるんでしょうけどね！きつと！

追記…ライア総裁はリアの正体や経歴を知った上で親しくしていま
す。その辺もその内書けたらいいな！

第四話（間） 「グラールには従順清純派メイドさんタイプより生意気タメ口ボク

マクマホンじゃ無くてオクラホマミキサーじゃ無くて幕間ってなヤツです。あの、大体のアニメや漫画で一番内容が無くて笑える、あの辺りですね。

なるべくギャグっぽく仕上げようと頑張ったんですが、所詮は金属製の箱ッ！（キリッ）

ギャグセンスは流石の皆無ッ！！（キリッ）
無駄な努力だったッ！！（キリッ）

第四話（間） 「グラールには従順清純派メイドさんタイプより生意気タメ口ボク

「あら、意外と出来る子だったみたいね？」

そう言いつつ、随分と綺麗になっている部屋を嘗め回すように見回しつつ、キツチリとベッドメイキングの施されたベッドに腰を掛ける。

と、同時にまるで魔法少女から露出度を引いて、聖職者の服装を足し合わせたような緑色の服に身を包み、服と同系色の長い帽子を被った、私のお尻ぐらいの背丈のお人形のような少女がトコトコと歩いて来た。

確か型番は『GH440』だったか。出発前に入力しておいた名前を呼ぶ。

「ただいま、メリー。ちゃんとお仕事できる子みたいでよかったわ。」

「はい、お帰りなさいご主人。」

「ん？」

「？　どうかした？」

「いえ、タメ口のパートナーマシナリーって随分と斬新なセッティングだと思っただけよ。」

「ああ、それはきつとニーズってヤツだね。きつと居るものなんだよ、従順なメイドさんタイプより生意気な妹タイプの方が燃えられるが。」

「ふん？　あなた随分詳しいのね？」

「まあ、そう言うニーズに応える為に作られたタイプだからね。」

「へっ・・・ちなみに、燃えるって何に燃えるのかしら？」

「え、それは・・・。」

頬を赤く染めて目線を外す。その様子があまりに可愛くて、ついついイジワルしたくなってしまった。

「な・に・に・燃・え・る・の・?」

「え、えくと・・・その・・・」

「えくとじゃ分からないんだけど?」

「う、ううう・・・」

顔どころか耳まで真っ赤になり、もう涙目になってしまい、帽子を引っ張って目元まで隠してしまっている。

流石にこれ以上はかわいそうだと思い、後頭部のあたりにそっと手を添えて撫でるようにしながら、

「うふふ、大丈夫より、ちゃあんと分かってるからね。それに私、機械にそう言う事を求めるつもりも毛頭無いから安心してね。」

「あうう・・・酷いよお・・・」

「あらあら、一応同性なのだけどう? あなたってむしろそっちの方がって子なのかしら?」

「ち、違うよ! そうじゃ無くて! ...んもう、ご主人のイジワル!」

そう言ってベッドのある場所から離れて、キッチンへと逃げるように走って行く。

それを笑って見送ってからバスルームに行き、シャワーを浴びて寝巻きに着替えて床に着く。

その晩、私の眼帯として巻いているタオルを取ろうとした誰かの腕を捕まえる。嫌に細い腕だった。

「誰？」

「あ、あの、ボクだよ！　メリーだよ！」

「ああ、メリー。」

そう言って掴んだ細い腕を放してやる。上半身を起こし、私の隣に座るようにしているメリーを見下ろす。後でメリーから聞いた話なのだが、その時の私の目付きはまるで、『お預けをくらった猛獣のような眼』だったらしい。

「メリー？」

「は、はい！」

「あなた、少し生意気に設定されてるらしいけれど、世の中には生意気や悪戯で済む事と済まない事があるって、わかってるのかしら？」

「え、ええ、まあ……。」「

「・・・良い？　『私から絶対に眼帯またはそれに準ずる物を取らない事』。分かった？」

「は、はい！　分かりました！」

「うん、分かれば良いのよ、分かれば。」

そう言ってメリーの頭をポンポンと軽く叩いてから布団を持ち上げて自分の体に乗せ、眠りにつこうとする。その時、ぼそりと言付け加えておく。

「もし破ったら、起動状態でスクラップにするから。」

「は、はい！ 心得ましたあ！！」

「フツ・・・まだまだだね、エミリア。」

「むぐぐぐ・・・ちよつとリア！ なんなのよこの生意気この上ないパートナーマシナリーは！！」

「あらあら。」

今日も今日とて、パルムのラフォン草原。今度は突然変異の原生生物を捕獲して欲しいとお達しだった。名前は・・・失念した。依頼主はイン・・・なんとか社って大企業だったと思う。

何でも、色々な研究に使うらしいのだが。しかし、強引に実験台にされた経験のある私としては若干抵抗のある仕事だったりする。とは言え、仕事は仕事。

報酬はかなりしょっぱかったような気がするが、それ位の報酬し

か出ないような危険度の低い依頼の方が、エミリアの訓練には丁度良いだろう。

まあ、今回はいつの間にやらシップの中のコンテナに潜んでいたメリーが付いて来てしまっているのだが。

「セイバー系統の武器を持っておきながらダガー系統の武器を扱うようなド至近距離まで近付くなんて・・・ホント、ハウツー本を読んだだけって感じだね。」

「だってしょうがないじゃん！あたし最近まで戦ったことなんてなかったんだし！」

「ボクだって最近起動したばかりだよ？そんなボクにも劣るなんて・・・まったく、本当に駄目だなあ。」

「うぐぐぐ・・・もう！ リアも何か言ってよ！」

「あらあら。」

「そこ！誤魔化さない！！！」

「んっつと・・・。」

正直、メリーの言っている事は吐き気を催す程度には正論だ。故に、真正面から言い返すのは難しい。なので、今回は揚げ足を取る方を選ぼう。

「メリー、ちょっと言い方が悪いわよう？ あと、貴女も人の事言えない程度には槍を振る間合いが近いんじゃないかしら？ 折角の長い得物なのに、そのリーチが生かせてないわよう？」

「え、うん・・・でも、エミリアにはこれ位言わないと思って思ったんだけど。」

「いいえ、エミリアはアレで結構飲み込みが早いんだから。そんなに罵詈雑言織り交ぜなくても分かってくれるわよう？」

「うん・・・分かった、今度から気を付ける。」

「うん、素直でよろしい♪」

視線を少しずらし、エミリアへと向ける。少し離れた場所で、エミリアがその場で軽く素振りをしている所だった。

と、その奥で干し草にも似た、褪せた黄緑色の巨体が動いているのが見えた。全身は硬そうな外殻で覆われているらしく、手足が合計で四本しか無い所を除けば昆虫が最も近い分類に見える。

その両腕と頭部は胴体や足に比べると明らかにオーバーサイズであり、両腕の先には大きく、金属光沢のある爪が生えていた。

しかしその爪自体は特別尖っているワケでは無く、むしろそれはメリケンサックの様な用途を感じさせる物だった。

「エミリア、ちょっと静かに。」

「へ？」

「奥にあの・・・ア・・・アス・・・えくと・・・なんだっけ？」

「アスターク。まったく、何でブリーフィング受けてないボクが分かって、まともにブリーフィングを受けたハズのご主人が分からないんだ？」

「あらあら。うん、そのアメトーク」

「アスターク。何で面白い回とつまらない回が半々の深夜番組と間違えるの。」

「そのアカツキ」

「アスターク。金ぴかロボでも忍者の秘密結社でも無いから。」

「そのアレイスター」

「アスターク。どうして二十世紀最大の魔術師の名前が出てきたの？」

「そのモハメッド・アリ」

「アスターク！！！！どうすれば伝説のボクサーと間違えるの！？それに『ア』しか合って無い上にその『ア』も中途半端な所だよね！？もうご主人、いい加減にしないとホントに怒るよ！！？」

「そんなに怒鳴るから。ホラね？」

そう言ってアゴで斜め上の方を指す。と、そこには先ほどまで遠くに居たハズの巨体が、右腕を大きく振りかぶったポーズで上から降って来る所だった。

エミリアは飛び上がったタイミングに合わせてしゃがみ込む事で回避し、メリーは慌てて真後ろに跳んで逃げる。

私はどう動いても今からだと間に合わない。

アスカラングレーじゃ無くてなんだっけ？が目の前まで迫る。

私は咄嗟に膝を折ってその場に崩れるようにして仰向けになるように背中から倒れこみ、ポケットから強烈な睡眠薬が入ったアンプルを右手で取り出す。

アサシングリッドが私の頭の上数ミリの所に腕を落着させると同時に、そのままディープキスが出来そうなほど顔に近いアジアンカ
ンフージェネレーションのアゴと思しき部位の下の方、平たく言えば首の血管が通ってそうな辺りに右手に握っていたアンプルを手が埋もれるほど深くに差し込み、中身を挿入する。

すると突然、力が抜けたかのようにガクッと頭が前に落ち込み、

「~~~~!!!!!!」

本当にディープキスするハメになってしまった。

「アッサラームアレイクム・・・恐ろしい相手だったわ・・・。」

「ま、まあまあ！別にファーストキスとかじゃ無いんでしょ？　ホラ、そんなに気を落とさないで！」

「と言うかアスタークだってばご主人。アラビア語で挨拶してどうするつもりなのさ。それにしても何と言うか、張り合いの無い仕事だったね。」

「ああ、それならワケがあるそうよ。」

「ワケ？」

「ええ、何でも、複数の軍事会社や傭兵に依頼を回したらしくって。それで、10のグループで一匹ずつ、合計10匹捕まえるって計算らしいわよ。」

「なるほど、つまりその10のグループで報酬が等分されて、そのせいで異常にしょっぱい金額しか報酬が貰えなかったってわけね。」
「ええ、そう言うこと。で、ウチが一番速かったらしいわよ。報告入れる時に驚かれちゃったわ。」

「ふん。ま、ボクとしてはどうでもいい事だけどね。」

「あら薄情ね。」

「うん……あたしとしてはもうちょこっただけ、練習したかったかなあ……。」

「あらあら？　じゃ、やって行く？　特別メニュー♪」

「う、遠慮しとく……さ！　とっとと帰ろう。帰って運動した分何か食べたいし！」

「ボクも早く家に戻ってお風呂に入りたいな。」

「あら、じゃ、早上がりさせて貰いましょうか？」

「「おー！」」

第四話（間） 「グラールには従順清纯メイドさんタイプより生意気タメ口ボク

本編と関係があるような無いような？ そんな第四話でございまして
ございましたですよ！ さてさて、次から第二章に入って行く形に
なると思いますですよ！ ってなワケで、次回までしばしお待ち
を〜！ ではでは〜！

あ、ちなみにこのパートナーマシナリーの話は雑炊さんのを読んで
感化された結果です。勝手にパクってスイマセンでしたあ！！

第五話「この時間が永遠に続けば良いのに。」（前書き）

何でこんなに次話投稿が早かったのかって?! それああんた、事前にこの辺りまで書いてあったからに決まってるでしょ! ってなワケで、本編第二章、始まり始まりでございますー!

第五話「この時間が永遠に続けば良いのに。」

まるで揺れの無い快適極まりない船をわざわざ手動航行モードで、しかもわざわざワープゲートを通らないルートで悠々と航行して行く。

行き先はクラッド6のリトルウィング社用船用船着場だ。鼻歌交じりに飛ばしている私の肩をエミリアが叩く。

「ねえ、ちよつと良い？」

「ん？ 何かしら？」

「何でわざわざ手動で、しかもワープゲート使わないルートで行ってるの？ 経費と時間の無駄じゃない？」

「あらあら。でもね、エミリア。さっき見た入ってるお仕事の中には急ぎのお仕事は一つも無かったもの。時間は少し無駄に使うぐらいが丁度良いのよ？」

「いや、でも結局燃料は無駄使してんでしょ？ そう言うのでイチイおっさんにどやされるのイヤなんだけど。」

「大丈夫よ。無駄使したのは私だもの、どやされるのはきつと私だけよ。」

「いや、だからあ・・・あ、通信だ。」

そう言って少し強引に話を切り上げてエミリアがコックピットフロアの中央にセッティングされている仕事の受付を行ったり会社からの通信を受ける「スゴイビジフォン」の方へ行き、掛かって来た通信を受ける。発信先の名前を見た時、露骨にエミリアの表情が曇る。まるで職員室に呼び出されてイヤイヤながらに入る子供のような顔で回線を開き、通信を始める。

向こうが色々とかましく言い続けているのか、エミリアは

「・・・・はい・・・・はい・・・・。」

と言って答えるばかりで、明らかに表情もテンションも沈んで行く。

「ええと、本人は今月のツケは払ったって言ってたんですけど・・・はい・・・分かりました、本人にそう伝えます・・・。」

そう言って通信を切り、エミリアが海溝を思わせる程に深く重い溜め息を吐く。

「今の誰宛？」

「おっさん宛。ちなみに今のは家からの転送通信。ついでに相手はおっさんの行きつけの飲み屋。おっさんさあ、あたしには働けーって言うけど自分は昼間からお酒飲んでばっかだし、飲み屋はツケで飲んでくるし・・・バリバリ働いてとは言わないけど、人並みにはちゃんとして欲しいよね。アレでも一応あたしの保護者なんだし。」

「確かにそうね。ツケ払いは良くないわね。まあ私も食い逃げの一つや二つや三つする事もあるけどね。」

「いやいやいや、食い逃げの方がマズイでしょ!？」

「後で払いに行けば良いかなって思ってる。」

「そんなワケ無いでしょうが!？」

「でもツケ払ってそう言う事じゃ無いのかしら?」

「むむむむ・・・はあ、ともかくあたしはこの事をさっさとおっさんに伝えたいから、ちょっとだけ急いでくれない?」

「はいはい。」

そう適当に答えてターボポケットに点火して急加速をしたら、エミリアが盛大に転んだ。

そして椅子に寄りかかって眠っていたメリーは、コテツと転んだがそれでも寝続けていた。

どうやら急激な加速や急速に変わる重力方向に耐えられなかったらしく、エミリアが気分を悪くしたので、クラッド6に着いてから十分ほど小休止を取ってからリトルウィングへと向う。

歩いてる最中もエミリアは何処かおぼつかない足取りで、あっちへフラフラこっちへフラフラ、生垣に突っ込んだりもしていた。

少し面白いが流石に可愛そうなので、エミリアを支えながら事務所へと入って行く。

事務所では丁度昼休憩の時間なのか、チェルシーが電腦エネルギー補給用ゼリー（ライチ味）を吸いながら、テレビに釘付けになっていた。

流れているのはニュースらしく、グラールチャンネル5の新人リポーターの紫色のツインテールが少しリズムカルに画面の中で揺れていた。

「着工より二年。先月、ついに完成した亜空間発生装置の完成式典がパルムの同盟軍本部で行われました。式には、亜空間理論を確立した総合科学企業『インヘルト社』の『ナツメ・シュウ』代表取締役をはじめ、開発に加わった軍関係者や多くの企業が参加しました。今回披露されたこの装置により亜空間発生実験が成功すれば、有人での亜空間航行計画へと大きく前進することとなります。現在グラールが抱える資源枯渇問題に光明をもたらすこの研究、絶対に成功してもらいたいものですね。

今日のグラールチャンネル5ヘッドラインニュースはここまで！

ニュースキャスターはハルでした！ バイバイ！」

ニュースが終わる。と、画面で流れるスポーツニュースの特ダネらしい、ユニバースボール出場選手達をチュエルシーが睨みながら、何故か怒声を上げる。

「ノー！ ニュースそれで終わりナノ？ 納得いかないヨー！」

「なんでいきなり怒ってるの、チュエルシー？」

「今のニュース、スカイクラッド社が出てないネ！！ 亜空間航行の計画に、イッパイ出資してるんだヨ！ ウチの良い宣伝になると思ったのニー！」

「あらあら〜。」

しかし多額の出資をしているのは何もスカイクラッド社だけでは無いように思える。何せ、ほぼ確実にお金になる亜空間研究。

誰が一番お金を出したかによってどの程度の権利を得られるか等が決まってくると考えると、裸一貫になろうとも亜空間研究に出資したくなるものだ。

つまり、ある意味ではたった今このグラールで財政の実権を握っているのはこのイン・・・ええと、インヘルト社であると言っても過言では無いかも知れない。

それを鑑みるに、この出資ダービーで一番が何処なのかを伏せるべく、出資した企業の名前を一切出さないと言うのは、ある意味では正しい判断とも言えるかも知れない。

もっとも、これらは全て単なる想像でしかないのだが。

「スカイクラッド社はウチの本社じゃん。リトルウィングの宣伝にはならないって。」

「あら、でも風が吹けば桶屋が儲かるのよ〜？ 少しでもスカイクラッドの知名度が上がって〜、波風立った方が〜、リトルウィング

の利益にも繋がると思うんだけど？」

「そう言われると何かそんな気もして来るけど・・・そんなことよりチェルシー。おっさん、いる？」

「あ、そういえば、シャッチョサンが二人に用があるって言ってたネ。ニユース見ててすっかり忘れてたヨ。」

「ま、いいけど・・・奥におっさん、いるんだよね？」

「シャッチョサンのトコ行くなら、ついでにアレもお願いネ。チョット、待っててネ。」

そう言ってチェルシーはイスをスイーツと滑らせて移動し、自分のデスクまで戻ると、そこで一枚のメモのような物を取り、またスイーツとこちらへと戻って来てエミリアにそのメモを渡す。

「ランジェリースポット、リッチベルベット。ダグオラシティ店・

・・・ねえ、このいかがわしい領収書は、何？」

「経費じゃ落ちないカラ、自腹ダヨって伝えてネ！」

エミリアの額に縦に筋が立って行く。どうやら大分トサカに来たようだ。

「あのエロオヤジ・・・！ ツケの払い忘れのみならず、経費の無駄遣いまでするか！」

なうんだ、クラウチさんもしてるんじゃない、経費の無駄遣い。

私は、ふふんと鼻を鳴らして少し胸を張ってエミリアに少し得意げに、

「ほらエミリア、私の燃料の無駄遣いなんてまだまだ生温い物でしょう？」

「でも金額だけなら燃料の方が高い気がするけど。最近、値段高等

してるからね、航空燃料って。無駄に噴かした航空燃料に、更に無駄に噴かしたターボロケットの燃料代を合わせたら、これの1.3倍ぐらいになりそうだし。」

「うぐ……し、資源枯渇問題、早くどうにかならないかしらね……。」

まさかのカウンター。これには流石に面食らった。と、そんなやり取りを見ていたチエルシーが、時計を見て少しハツとすると共に、手を叩きつつ私達に声を掛ける。

「ハイ、モウお昼休み終わっちゃうカラネ！ 文句は奥でネ！」

「ちよっとおっさん！・・・ってうわ、酒臭っ！」

「ホント・・・まるでお酒を撒いたみたいに強烈ね・・・。」

到着早々、エミリアが思い切り顔をしかめる。

「よお、来たか。」

「来たか、じゃ無いっての！いつもの飲み屋からまた電話来たんだよ！いいかげんツケを払って欲しい、って！」

それから先ほどチェルシーに渡された領収書を、クラウチに突き付けるようにして見せる。

「それに、これ！」

「ああん？こりゃ資料の経費じゃねえか。どうしてお前がもってるんだ？」

「こないかがわしいものが経費で落ちるわけがないでしょ！常識で考えろ、常識で！」

「ああ？バカ、わかってねーな。こういう根回しも必要なんだよ。」

「どういう根回しですか・・・？・・・モトウブの有力なローグスが経営してるとかなら分からなくてもないですけど・・・。」

「お、良く分かってんじゃないか。」

「ええ！？」

正直、ほとんど冗談だった。そもそもモトウブのローグスが水商売の店を経営しているとは思っていなかったし、しかもダグオラシティみたいに大きな街に店を堂々と置いているなんて。

いや、それより確かにこう言うちょっと悪い事もしなくちゃいけないような仕事とは言え、本当にローグスと関係を持っているとは。

やはりビースト、横の繋がりが侮れない。

「まあいい、それよりも仕事の話だ。」

そう言うと、クラウチさんは画面に映る水着の女性を幾つか最小化して、幾つかの写真や資料を大きくして見えるようにする。

「喜べ、お前たちにふさわしい仕事を見付けてきてやったぞ。こいつは緊急かつ、重要な依頼だ。急ぎ、探して欲しいヤツがいる。」

「人の搜索・・・？ 何かの重要参考人とか、要人とか？」

「うんにゃ。俺が前に金を貸したヤツ。つまるところ、借金の取立てだ。」

「依頼主おっさんじゃん！ そんなの自分で探しに行け！」

「そうですよ。私達は使いっぱしりじゃ無いんですから。」

「やかましい！ どっかのタダ飯食らいがレリクスでの仕事ポカったからロクな依頼がこねえんだよ！」

「う・・・それを言われると・・・」

「ちよっと・・・言い返し辛いわね・・・あ、でもポカしたの私じゃ無いですね。」

「んじゃあエミリアだけに行かせるか？」

「それは・・・ちよっと・・・」

「ちよ！？」 むしろその反応の方が傷つくんだけど！？」

「コラ、ここで言い合っても仕方がねえだろ。さっさと話進めんぞ。」

これ以上脱線すると修復不可能だと判断したのか、そう言って無理やり話を切り替えるクラウチさん。なるほど、この人はこうやってのらりくらりとかわすのか。

「搜索対象者の名は「ワレリー・ココフ」。51歳、男性・・・種

族はビーストだ。ワレリーの船は、モトウブのクロウドッグ地方と場所が特定している。シティでもカジノでもなく・・・とてもヤツには用事が無さそうなヘンピな場所だ。」

「どうやって船の場所を特定したんですか？」

「ワレリーの嫁がアイツの船に発信機を仕込んでるんだと。で、訪ねて行ったら、取立てなら場所教えるからアイツに直にやれって、何故か怒鳴られちゃった。まそんなワケで、アイツの船の場所が分かるんだ。分かったか？」

「ええ、一応。」

「場所まで分かっているんなら、なおさら自分で行けば良いじゃん・・・。」

「何か言ったかごくつぶし？」

「なんでもないですー！」

そう言うと共にエミリアが踵を返すと、私の袖を引っ張って、

「こんな酒臭い場所にいたら、飲んでもないのに酔っちゃう！さ、いこいこ！」

と言う。まあ確かにもうそろそろこの場を離れたかったのは事実だ。なんせ本当にお酒の匂いがキツイ。エミリアに袖を引っ張られるままにその場を後にする。

船の中でぐっすり眠っていたメリーを部屋まで運び、ベッドの上に置いて部屋を出る。

部屋を出て真っ先に向うのはウェポンショップ。200メセタで借りていたブドウキ・ハドを返却し、新品の『ブドウキ・パム』を購入する。セットでダガータイプの武器を買いと割り引かれるそうなので、少し出費がかさむのが気になったが、とりあえず購入する事にした。

GRM社製のロングラン商品、その名もズバリ『ナイフ』。

テノラの製品は確かに頑丈で、大出力なフォトンジェネレーターを搭載しているので威力も見込めるが、いかんせんバランスが悪い。銃火器も、確かにバランスも大事だが、こと刃物に関しては特に重さのバランスが重要になって来る。銃火器での戦闘の際、百発百中がやはり最高だが、そう言うワケにも行かない。正直な所、百発中七十発が当たれば十分に生き延びる事が可能だ。しかし、刃物を用いた近接戦闘ではそうも言ってられない。

一太刀読み違えればその時点で胴と首が離れかねないし、一瞬遅かっただけで心臓を貫かれかねない。

まあ私はその程度では死なないのだが、それは横に置いておこう。軽量かつ高い次元でバランスの取れた素晴らしい武器と言えばヨウメイ社だが、それはフォトンジェネレーターの出力を犠牲にした上で成り立っているワケであり、やはり威力の不足が目につく。そ

れにデザインもあまり好きじゃない。

それらを統合した上で、やはり最高の妥協点としてバランスの取れた良い製品を提供しているのがG R M社だ。まあ、G R Mタイマー等と呼ばれる故障の多さが目に付くが。

流石に新品でそれは無いハズなので、今回の仕事分は持つてくれるだろう。

・・・まあ、今回の仕事は実入りの無い仕事なので、次の仕事分も持つてくれないと困るのだが。

船に戻ると、エミリアがいつも首に掛けているヘッドフォンを珍しく耳に着けて曲に聞き入っていた。

足音を立てないように注意しながら近付き、後ろからギリギリ視界に入らないぐらいの所まで耳を近付ける。僅かに聞こえて来た曲は、

「・・・I don't want this moment
to ever end・・・Where everything
without you・・・I want
you to know!!」

「わぁ!？」

「あらあら、驚かせちゃったかしら? それにしてもエミリア、『With Me』なんて聞いているなんて。人は見かけに寄らない物ね?」

「良いじゃん別に! それに、いつもはもっと別の曲も聴いてるし!」

「あら、悪いなんて言っていないのよ?」

エミリアが少し慌てたような手付きでヘッドフォンを頭から下ろして首に掛け、音楽プレイヤーのスイッチを切る。それから座席のシートベルトをキチツと締める。

「さ、どうぞ。行くんではよ?」

「あらあら。曲を聴きながらでも良いのよ?」

「そりゃあたしだって聴いてたいけどさ・・・だってあんたの操縦荒っぱ過ぎるんだもん。曲に集中出来ないって。」

「ん、でも今回は素直にワープゲートを使おうと思ってるから、多分大丈夫だと思うわよ?」

「え、そう? じゃ、大丈夫かな。」

そう言ってヘッドフォンを耳に被せるエミリア。音楽プレイヤーを取り出し、操作していると、何かを思い付いたように手を止めて、

私の方を向く。

「ねえねえ！　なんだったらさ、船内スピーカーで流そっか？　あんたも好きでしょ？」

「あらゝ、それは名案ねゝ。じゃ、お願いしようかしらゝ？」

「うん！　任せてよ！」

そう言うと共にヘッドフォンを再び首に掛け直し、席を立て船内スピーカーに繋がる端末を弄り始める。私はコックピットに座ると、揺れないように注意しながら船を発進させる。

ほとんどオートでモトウブ行きのワープゲートの前まで着いた辺りで、船内スピーカーからノリの良い、割と激しい数世代前の曲が流れ始める。

「じゃ、行くわよゝ。ちゃんとシートベルト締めておいてねゝ。」
「うん！」

「へー・・・おっさんはへんぴな場所って言ってたけど、その割りに観光プラント並に船が多いじゃん。」

「そうね、自然観察とかハイキングとかが静かにブームなのかしらね。」

「それは無いと思うけど・・・ってかさあ、何であたしらがおっさんの貸したものの取立てなんかいけないワケ？ はあ、経費だけじゃなくて以来まで私物化し始めてるよ、あのおっさん。誰かガツンと言ってくれないかなあ・・・。」

「ガツンと、ね・・・。私が言いましょうか？ 正直、上司がアレだと働く気力も湧かないし。」

「言っても良いけど、多分無駄だと思うよ？ あたしも言った事あるけど、全然話聞いてくれなかったし。あ、いや、でもあれはあたしだから、かな・・・。」

エミリアが少し暗い顔をして俯き、呟く。

「どうすればあたしの話を聞いてくれるようになるのかなあ・・・。」

「ん、そうね・・・うん、取り合えず、依頼を遂行しましょう。」

「えー？ そんな事であのおっさんが態度変えると思う？」

「少しずつ依頼を遂行して行けばその内、話も聞いてくれるようになると思うわよ？ でも、焦りは禁物よ？ 『信頼と言う木は育つのが遅い木である』って言葉があるぐらいだよ。」

「信頼、かぁ・・・でもなぁ・・・正直、この仕事って結構キツイし、あんまり向いてないような気がするし・・・だってホラ、さっきだってあんたのパートナーマシナリーに・・・」

「おいお前達！ここで何してる！」

その声に驚いて辺りを見渡す。が、中々声の主が見当たらない。確かに少し高めの男性っぽい声だったはずだ。声からして身長165は超えていそうなのだが、まるで見付からない。

「どっち見てんだよ！こっちだこっち！」

そう言われて真後ろの下の方を見る。と、そこにはまるで子供のような背丈しか無いビーストの男性が立っていた。肌は黒く、目が青く、髪はオレンジ色で逆立っている。

その目付きや物腰から、これは子供では無く大人の小ビーストだと当たりを付けたが、正直言って小ビーストなんて初めて見た。

「あ、あら～？ あらあら～、もしかして小ビーストの方ですか？」

「そうだよ、見りゃわかんذار・・・で？お前らここで一体何してるんだ？」

「あたし達、人を探してるんです。」

「人探し？」

「トニオー！こっちは駄目だよ、人っ子一人居ない。そっちは・・・ああ、二人見付けたんだ。」

そう言ってもう一人、こちらもまた非常に背丈の低いビーストの女性が現れた。こちら歩き方などから察するにほぼ間違い無く大人の小ビーストなのだろう。

「いや、こいつ等は今来たばかりの同業者らしい。」

「あ、そうなんだ。」

「ええと、あなた方はここで何を？」

その質問に対して、トニオと呼ばれた男性の方の小ビーストが、
「おっといけね」と言った事を小声で言っ

「その質問に答える前に、自己紹介をさせてくれ。俺はトニオ・リマ。んで、こっちは・・・」

「あたいはリイナ・リマ。あたい達、夫婦で傭兵をやってるんだ。」

「あ、あたしはエミリア。エミリア・パーシバル。んで、こっちはあたしのパートナーの・・・」

「リア・ゲートです。私達はリトルウィングと言う軍事会社の社員でして、お仕事で人を探しているんです。あなた方も人探し何かですか？」

「ん、俺達はこの文化保護地区を見回るように言われて来てるんだ。」

「文化保護地区？」

エミリアが首を傾げて聞く。と、言うのも無理は無いだろう。なんせ辺り一体は単なる密林にしか見えない。自然保護区ならまだしも、周辺には文化的な物は一切見当たらないのだ。それを文化保護区と呼ばれても、イマイチピンと来ない。

「・・・この、密林が、ですか？」

「・・・お前達、そんな事も知らないでここに来たのか？」

トニオがもの凄く深い溜め息を吐く。本当にお前らは教育を受けてきたのか？とか、お前ら実際何歳だよ？とか、何で説明しなきゃなんねえんだ？とか、そう言う心の声が聞こえてくるぐらいに深い

溜め息だった。その溜め息を聞いて、エミリアが少し頬を膨らます。

「駆け出しだから仕方ないんですー！ んー、でも文化保護地区とある観光地にしては誰もいないって言うのは不思議だね。船はこんなにいっぱいあるのに・・・。」

そのエミリアの意見を聞いたトニオが、少しニヤリと笑う。

「なるほど、勘は良いみたいだな。」

「さっきあたいが出くわした原生生物もやけに凶暴だったし、多分、奥で何か起こってるんじゃないかな。」

「うーん、だとすると、奥の方を探している人も居るかも知れませんがね。」

「なんにせよ、奥に進まなきゃ見回りも人探しもできねえしな。」

「え、もしかしてそれ、奥に行く流れ？」

「ええー。まあ、さっきちょーっと物足りなかったんでしょー？なら丁度良いんじゃないかしら？」

「えー・・・取立てなら戦わなくて済むと思ったのに・・・。」

「ならー、一人でお留守番する？」

「それは寂しいからイヤ！」

「と、言うワケでー、私達は奥へ行きますのでー。それではー。」

「おいおい、ちょっと待てよ！」

そう言ってトニオが奥へと行こうとした私達を呼び止める。

「どうせ同じ奥に行くんだ、一緒に行かねえか？」

「あ、それもそうですねー。それでは、よろしくお願い致しますー。」

「うん、よろしくね。それじゃ、取り合えずカーシュ族の村に向うって事で、良いかい？」

「ええ、お任せします。船を置いて何処に行ったのか分からない以上、それで問題ないですよ。」

「村？ その村までの道のりとかって分かるの？」

「うん。カーシユ族は各地を転々とする部族なんだ。だからはぐれた仲間が分かるように、文字で目印を残してるんだ。で、その文字をあたいはあらかじめ学んできたから読めて、それを辿れば村まで行けるってワケさ。」

「へー……どんなのなんだろう。」

エミリアがカーシユ族の文字に若干の興味を惹かれたところで、一向は歩き出す。目的地は取り合えず、カーシユ族の村だ。

第五話「この時間が永遠に続けば良いのに。」（後書き）

へい、反省してます。でもだってこの話にかなりピタンコだったんだもん！ と、言う訳で、是非とも聞いてみてください。『SUM41』の『With Me』です。SUM41っぽく無いだとか商業用曲だとか色々意見御座いますが、わっちは好きですよ、こう言うのも。てな具合で今回はここまで。ただ、次回は何時になるかちょっと分からないので、直ぐに来ると思わずに、気長に待っていてくださいまし。ではでは。

第六話「私に、あなただけが意味をくれた。」

「へー、これがカーシユ族の文字なんだ！なんだか面白い形してるね！」

どうやら初めて見るカーシユ族の文字が気に入ったようで、一番前に出て解読をしているリィナの後ろから覗き込むようにして文字を見ている。

「んー、面白い形って言うのはー・・・ちょっと分からないわねー。それで、何て書いてあるんですかー？」

「えーっと・・・ここからの大雑把な方角しか書いてないみたいだね。『日の沈む方角』って書いてあるから、多分、西の方角だろうね。」

「西か。って事は、あっちの方になるな。よし、行くぞ。」

「あ、ちよっと待って！面白いからもうちょっと見てたいんだけど・・・」

「置いて行くわよ？」

「ああんもう！」

本当に置いて行く勢いで少しだけ速く足を動かすと、エミリアが小走りで追いついて来た。追いついて来たエミリアの方に振り向くと、原生生物が遠くからこちらを見ているのが見えた。

「トニオさん、もう武器を出しておいた方が良いかも知れませんか。」

「ん、そうだな・・・出てからでも遅くは無いだろうが、まあ確かに備えておいた方が良さそうだな。」

そう答えると共に、トニオがクロータタイプの武器を右手に装備する。私も先ほど購入したナイフとブドウキ・パムを手に持ち、何時でも戦える状態にしておく。リイナもダガータイプの武器を装備し、エミリアも釣られるようにしていつも使っている特異な形状の長杖を手に持つ。

「あら〜？ 結局、それにしたのね〜？」

「いや、セイバー系を諦めた訳じゃないよ？ ただ、皆の装備を見ると、コッチの方がバランス良いかなくって。」

「あらあら〜。そんな事を考えれるなんて、随分と成長したのね〜♪よしよし〜♪」

そう言ってブドウキ・パムを持つ左手でエミリアの頭をぐりぐりと撫でる。

「い、痛い痛い！ グリップがゴリゴリして痛いって！」

「あらあら〜。」

そう言ってパッとエミリアの頭から手を離す。と、同時に前からこちらに切り掛かるトニオからの一撃を、真後ろに反る事で避ける。どうやら、真後ろから大型昆虫のような空を飛ぶ原生生物が突進をして来ていた所だったらしい。その原生生物の、コックピットのような複眼に、トニオの爪が深く刺し込まれて、中から緑色の液体が勢い良く噴出し、

「〜〜！」

私に思い切り掛かる。シールドラインのお陰で液体は直ぐに体から流れ落ちたが、それでも正直、気分の良い物では無かった。

大分進んだ所にある、少し開けた場所。

先ほどの腹いせに少々派手にやり過ぎてしまったかも知れない。

辺りには大小様々、種類も豊富な肉片の数々が散乱し、緑や赤と言った血液的な体液がそこら中で入り乱れて競うようにして水溜りを作っている。

今足をあてがっているのは、ギリギリで生きているヴァンダの心臓。皮膚や骨格だけをナイフで削ぎ落として、心臓に直に足を当てている状態だ。

どくんどくんと言う動きが、未だ生命活動が続けていると私に訴

えかけて来ている。その感触が心地良く、このまま止まるまでこうしていかとも考えたが、トニオとリイナ、それとエミリアが先を急ごうと言うので、仕方なく心臓を踏み潰した。

その感触は水風船を踏み潰した感触よりも生魚の塊を踏み付けた感触に似ていて、プチツというよりもグジョツとした感触が靴越しに足の裏に伝わってきた。

「お前、割とエグイ殺し方するよな。」

そうトニオに言われて、歩みを止めながらも自分の行いを振り返ってみる。

例えば、あの巨大な羽虫。アレは先に羽の付け根と体液を発射してくる銃口をハンドガンで撃ち抜いて地面に落としてからナイフで恐らく急所であろう場所を上から押し切る。

例えば、あの巨大な花。アレは口からテクニク(?)を撃ち出してくるので、その照準がズれるように弾丸を花卉の付け根辺りに刺し込んでいる。その内、勝手に耐えられなくなって、勝手に自爆する。

「そうですか? 実戦で威力の低い武器を扱って戦うなら、こう言った相手の動きを抑制する攻撃の方が効果的だともうんですけど?」

「ああ、確かにそうだ。でもよ、さっきの心臓を直に踏み潰すのは実戦的とは言えねえんじゃないか?」

「あれは・・・確かにそうでしたね。」

確かに、アレだけは少々やりすぎた感があった。とはいえ、フラストレーションがああ心臓の動きに合わせてとろけていく、あの感覚。あれはきつと誰だって病みつきになる筈だ。

あの何とも言えない、相手の命を完全に手の内に納めた感触。トニ

オにもリイナにも是非ともやってみて貰いたい。エミリアには少し早いかも知れないが。

そんな事を考えていたら、どうやら少々下品な顔になっていたらしく、エミリアに不安そうな目で見られる。

「リア・・・あんたさっきからニヤニヤしてるけど、大丈夫？」

「え、ええ大丈夫よエミリア」。・・・あ、アレってカーシュ族の目印じゃないかしら？」

そう言って話題を反らす。先ほどから幾つか見てきたので、何となく『ソレっぽい』物の見分けが付くようにはなっていた。

四人でその目印っぽい物に近付いて行く。それはどうやら新しい物のようで、先ほどの風化しかけの文字列とは明らかに違って見えた。何より、先ほどまでの物よりも明らかに長い。意味不明の言語だったとしても、それが長い文章なのか短い短文なのかぐらいいは見分けられるように、その程度は分かった。

無論、読めるハズは無いのだが。

リイナがまず解読を始めるが、それまでよりも難しい文法を用いているらしく、口の中で「ん」と・・・」や「ええと・・・」と言って中々解読が進まないらしかった。

「あ、なるほど。これが最後の目印みたいだね。」

「え？」

「ん？」

「あら？」

「ふむふむ、なるほど・・・良かった、そんなに遠くは無いみたい。」

リイナより先に、エミリアが解読してしまった。トニオとリイナと揃って口をポカンと開けてエミリアを見詰める。と、まず先陣を

切ってエミリアに疑問をぶつけたのはトニオだった。

「お前・・・読めるのか？」

「え、だってさっきからリィナの後ろから見てたし。」

「だとしても、随分と理解するのが早いよね？」

「いや、分かるでしょ普通？　だって文法自体はそこまで難しくないし、類似の文字は大体同じ意味が多いし・・・」

「ええと・・・少なくとも、あたいが読めるようになるまでは一月ぐらいは勉強したんだけど？」

「え・・・ええと・・・。」

大人三人（内二人は小さいが）に詰め寄られてしどろもどろし始めるエミリア。余りにも反応が可愛いので更にプレッシャーを掛けようかとも思ったが、エミリアが話題を終了させるべく手を振りながらそっぽを向く。

「と、ともかく！道はもう分かるんだし、早く行こうよ！」

そう言って歩き出すエミリア。と、その時だった。

「お前、止まれ！」

そう声が聞こえると共に、森の奥、エミリアがまさに今足を向けた方向からフォトン製の矢がエミリアの方へと飛来する。私はエミリアの重心が乗っている左足の踵辺りを、低出力なスタンモードに切り替えたハンドガンで撃ち抜き、遠距離から強引な足払いをしてエミリアの体勢を崩す。

矢は真後ろに反るようにして倒れこんだエミリアのギリギリ真上を通過し、私の方にまで飛んで来る。それを右手のナイフで受けて威力を減殺する。

私がエミリアを倒して矢を受けるまでの一連の動作の内にトニオは右手にクローを持ち、矢を放った人に迫る。リィナも両手にツインハンドガンを持ち、トニオの斜め後ろに付く。

そしてトニオが飛び掛り、クローで切り付けようとしたその時だった。矢を放った人・・・派手な民族衣装を身に纏った、端整な顔立ちの少年が真上に手をかざす。それと共に後方から赤い何かが魔方阵のような物と共に召喚され、その赤い物が放った炎の塊がトニオに迫る。

トニオは空中におり、その一撃を避ける事は不可能だった。しかし、斜め後方に付いていたリィナがトニオに真横から飛び付き、炎の塊はトニオに当たる事無く通り過ぎて行った。

そしてその炎の塊はそのまま放射状に飛び、私の立っている場所に落ちてきた。それを寸前で察して、飛び込むような動きで避ける顔を上げて、トニオとリィナ、それと民族衣装の少年が居る方を向く。民族衣装の少年はそれまで持っていた弓を槍に持ち替え、高台から飛び降りてトニオとリィナの目の前に降り立った、丁度そのぐらいタイミングだった。民族衣装の少年が言う。

「おまえ達、絶対にここは通さないぞ！ 村はぼくが守るんだ！」

それから少しだけ驚いた表情をしてから、それまで以上の憎しみや恨みを込めた眼差しと共に槍の穂先を私に向ける。

「とくにおまえ！ おまえは絶対に通さないぞ！ 空からきた悪意
！！」

「あらゝ？ 初対面で随分と嫌われちゃったわねゝ？」

少々気になる事を言っていた気もするが、それを無視して少しおどけてみせる。トニオとリィナは民族衣装の少年が高台から飛び降りてくるまでの間に、距離を取っていた。

私は右手のナイフの出力をスタンモードに変更すると、全速力で民族衣装の少年との間合いを詰める。相手の少年も、槍の届く間合いまで近付くべくこちらに突進してくる所だった。

相手の得物は槍。確かにリーチの長い得物だが、逆に近い相手に対しては少々取り回しが悪く、間合いに入ってしまったえばナイフでも十二分に勝機があった。

私が間合いに入ろうとすると、それを阻止すべく、そして致命の一撃を入れるべくして槍による突きが繰り出される。それを右手のナイフでいなして槍の手元の更にその奥まで間合いを詰める。

そして少年の左肩に私の右肩を押し当てる程に密着すると、左手に握っていたハンドガンを少年のコメカミに押し当て、躊躇無く引き金を引く。

出力は勿論、スタンモードに切り替えてあった。

しかし、頑丈さが売りで、作りが大雑把で、しかも大出力なテノラの製品だ。

しかも完全なゼロ距離。

安物と言えども、コメカミに密着させた銃口から放たれたフォートの銃弾は、少年の脳を大きく揺らしてお釣りが来る威力を容易く叩き出した。

「うわ……」

「あちゃ……」

「おいおい……」

「あらあら……」

少年のコメカミから血が流れる。その量は中々の物で、これはひ

よつとするとひよつとするかも知れないと思わせるには十分な量だった。

リィナから、少年の止血がてらに説明を受けて、少々の衝撃と共に、強い後悔の念を抱いた。

この、うっかり手荒くのめしてしまった少年は、カーシュ族である可能性が高い事。カーシュ族は種族ではなく部族であると言う事。カーシュ族の戦士は確かに好戦的だが、本来は心優しく、警告や交渉も無しに戦闘を仕掛けてくる事は、通常では有り得ないと言う事。私が与えた外傷が一番大きい物の、それ以外でも既に戦闘を行った直後のような傷跡が体中に見受けられたこと。

「え、と言う事は……」

「うん。カーシュ族の村で何か起こってるのは、ほぼ確実だと思う。」

つまり、気を失わずに動きだけを止めて話を聞ければ、色々と分かったかも知れないと言うのだ。この大雑把な作りのハンドガンが非常に恨めしかった。

トニオが頭の後ろを掻きながら、少し面倒くさそうに言う。

「あゝ……仕方ねえ、二手に分かれるか。俺らは船までコイツを治療しに戻る。お前とエミリアで先に行って、村の様子を見て来い。」

「ええ！？ いや、それだったらあたしらが戻った方が良いんじゃない？
……？」

「別にそれでも構わないけど、あんた達の船に医療ポッドってあるかい？」

「う……無い、と思う……。うゝ、どうしてこんな危なそうな事を……そりゃあ、カーシュ族の村の事は気になるけど……」

「なら、私だけで行きましようか？」

「道は、分かるのかい？」

「あら……。」

エミリアの方を見る。明らかに嫌そうな顔をしているが、それでも道案内が出来る人が絶対に必要だった。

「お願い、出来るかしら？」

「うゝ……分かったわよう……。その代わり、ちゃんと守ってよね！」

「ええゝ、任せてゝ♪」

トニオとリィナが少しホツとしたような顔をしてから、止血を終えた少年を担ぎ上げる。

「それじゃ、俺達もなるべく早く後を追いつけるからよ！」

「あんまり、無理しないようにね？」

「ええ、よくお願いしますね？」

「おう、じゃ、後でな！」

そう言つてトニオとリィナが来た道に戻り始める。それを少しの間眺めていたエミリアが、こちらに向き直ると、少しだけ早い歩調で歩き始める。

「じゃ、あたし達もいこつか？　なんだかんだ言つても、やっぱりカーシュ族の事が気になるし！」

「ええ、行きましようか。」

途中、バグデッカと言う顔面が分厚い装甲で覆われた大型の原生生物との戦闘があったが、どうにか切り抜ける事が出来た。

武器の威力が足りない為に、装甲の届かない脇腹の辺りに、こちらに向って飛んで来たサンド・ラッピーを掴んで突き刺して致命的なダメージを与えると言う、何とも間抜けな倒し方をしたのも、終わってしまえば良い思い出だ。

エミリアが言うにはもう直ぐそこらしい。なるほど、確かに火の匂いがして来た。火は言い換えればそこに人が住んでいる象徴とも言える。

しかし、その匂いにもっと別の匂いが混じってくる。植物が焼ける匂いと、動物が焼ける、微妙な匂い。木材が焼け、鉄やガラスが溶け出す少し不快な匂い。それらと合わさって、憎しみや復讐心と言った悪意的感情の匂いが鼻腔をくすぐる。久しく嗅がなかった匂いだが、何と香しい事か。しかしその他の匂いが余りにも不快過ぎる為にそれらの僅かな芳香も台無しとなってしまっている。もっとも、これらの匂い全てひっくりくるめて、エミリアから言わせれば、

「何これ・・・何か焦げ臭い・・・。」

らしいのだが。しかし、確かに普通に考えればひたすらに焦げ臭く感じるだろう。小走りで密林を抜けると、そこは異様に強い熱気とオレンジ色の光に包まれていた。

「まあ・・・。」

「何よこれ・・・」

エミリアと共に言葉を失う。

村が、燃えている。

その燃え方からして、恐らく火が放たれたのはつい先ほどの事なのだろうというのは容易に想像が付いた。何より私が驚いたのは、その火では無く、その火の中から人の匂いを幾つも感じた事だった。その内の大半は倒れていると思われる低い位置から感じ取れ、その他の立っくいそうな人数は、大雑把に数えた感じだと十人前後と言った感じだった。

「一体誰がこんな・・・」

「待って、エミリア。誰か出てくるわ。」

そう言ってエミリアを手で制す。

すると建物の間から、その原始的な建築物に対してとても不釣合いな格好の集団が現れた。その集団は皆バラバラの格好をしており、何よりもシテイで見ると類いのファッションが多く、原始的な建築物とはある意味で対極的な印象を与えた。そしてその一番前を歩く、赤いノートのような物を持ったリーダーらしき人物が更に異彩を放って見えた。

耳の形などからヒューマンらしい事は分かるのだが、異常に肌が白く、髪も完全に真っ白、眼も赤いので恐らくはアルビノなのだろう。しかし何より問題なのは、その服のセンスだった。

真っ黒のロングコートを着ている、のは構わない。だがその胸を肌蹴させるスタイルは如何な物か。確かに私もヘソ出しなので人の事は言えない気もするが、あんな貧相な胸板を露出させた所で一体誰が得をすると言うのだろうか。もっと分厚い胸板を手に入れるか、

しっかりとした胸毛を生え揃わせてから出直して貰いたい。もつとも、あの真っ白い肌にたくましい胸毛が生えていたら、いっそ色々通り越して吐き気を催しそうな物だが。

と、そこまで感想を抱いてから、エミリアが声を上げる。

「まさか、この火事ってあいつらが・・・？」

「ええ、恐らくその可能性が高いでしょうね。見た感じだと、あの黒服の男がリーダーのようだけど・・・？」

そこまで言って、もう一つ違和感に気付く。リーダーらしい男は悪い笑みを浮かべているが、その後ろの人達は皆揃って上の空で、焦点の合わない目をしている。

「んっ・・・？・・・洗脳、かしら・・・？」

洗脳に関しては色々な物を見て来たので、それなりには詳しいつもりだ。例えば、ビーストだと、洗脳する時にはそのビーストが保護意識を持つ対象を任意で再設定してしまえば良いとか、ニューマンは自意識が強いせいで意識を保った状態での洗脳が難しく、意識を殺さなければならぬから面倒だとか、ヒューマンは記憶を少し弄るだけで意外と思いのままに動かせるようになるだとか、キャストは論外だとか、そう言った話だ。あの様子だと、意識を殺して身体だけにした上で、その身体を任意で動かしているように見える。実はこの意識を殺すと言うのが意外と厄介で、そこそこの設備が必要なハズなのだが・・・。

「洗脳？・・・ってかそれよりあの黒服の斜め後ろ！あれってワレリー・ココフじゃん！」

そう言われて黒服の斜め後ろ辺りの人物を見る。そこには確かに、

先ほど見た中年を過ぎたぐらいのビーストの男性の写真と、ほぼ同じ顔の男性が立っていた。

ほぼ、と言うのは、今の表情が余りにもマヌケ過ぎて、同一人物かどうかの判断に少し迷ってしまったからだ。それほどまでに、酷い顔をしている。

「確かに・・・かなり間抜けな顔をしているけど、ワレリーで間違いは無さそうね。」

「間抜けって・・・」

「ん？ 貴様達、ここで何をしている？」

と、ここで先ほどまで赤いノートのような物を手に持ってニヤ付いていた黒服の男がこちらに気付いた。隠れるつもり半分に、木の陰から見ていたのだが、バレてしまったのでは仕方が無いと、木の陰から出て男と対峙する。

「そちらこそ、ここで何をしていらしたんですか？ 見た感じですと、放火を行ったように見えますけど？」

「それならば、どうだと言うのだ？ 消え行く存ぎ・・・キ、キサマは・・・ッ!？」

途中まで言って、発言を止める。そして、忌々しい事この上ない事を示す程に酷く顔を歪ませる。中々に整った顔立ちをしていると言うのに、まったく台無しだ。

「キサマ・・・悪意か・・・！ まさか封印を逃れた悪意が居るとはな・・・まあいい、余興には丁度良いだろう。」

「私は貴方の言っている言葉の意味が全く分からないのですが？」
あと、質問に答えてください。」

「ふん、誰が悪意の質問などに答えようか・・・キサマのその化け

の皮、剥いであら消し去ってやる！」

そう言うと共に、黒服の男がエミリアの目の前まで、それこそ本当に、比喩表現抜きで『あつという間』に移動する。

私は咄嗟にエミリアを右肩で押して動かし、左手のハンドガンを目の前の黒服の男へと向け、躊躇無く発砲する。男はその弾丸を、発射を見てから避け、素手だった両手に刀のようなセイバー系統と思われる剣を二振りナノトランスさせて、切り付けて来る。

その攻撃を右手のナイフでいなし、受け、時に避けながら、左手のハンドガンを攻撃の僅かな間隙に撃ち込んで行く。しかし、それらの完璧な隙を突いて放たれたハズの弾丸のその尽くが避けられ、防がれる。

右腕一本で両手から繰り出される攻撃を受けて行く内に段々と押され始め、最終的に、相手の両手から繰り出される全力の一撃を、ナイフで真正面から受け止める、と言う失態を犯してしまう。

それは例えるならば、超大型のハリケーンに対する木造建築のような、大津波に対する小船のような、火砕流に対する自動車のような、そんな暴挙。

当然の如くにナイフは、刃の部分はおろか、フォトリアクターに至るまでの全ての部品が粉々に碎け散ってしまう。そしてフォトリアクターが破壊された事により小規模な爆発が起き、私に小さな隙が生まれてしまう。その隙を見逃すワケも無く、既に振り切ったが為に引き戻せない両腕に代わって、足を用いて私の身体を大きく薙ぐ。

腹部を狙った回し蹴り、と言った方が分かりやすいだろうか。

その蹴りにより跳ね飛ばされた私は、近くの巨木にノーバウンドで衝突する。そして黒服の男は背後に多数の武器を召喚すると、その内の刃物を片端から私に投げ付けてくる。

最初は両腕、次に両脚、腹部、胸も貫かれ、最後の一本は私の眉間を射抜いた。その数実に十八本。

更に男は手を休めること無く背後の武器の中から拳銃を二丁手に持つと、私目掛けて大量の弾丸をばら撒き始める。その連射速度は、正に暴風雨のようだった。

十、百、五百発近く撃ったかも知れない。その光景を見て、堪えかねたエミリアが黒服の男に飛びつき、腕を掴んで射撃を止めるが直ぐに跳ね飛ばされ、銃口を眉間に突き付けられる。

「まずはお前から消してやろうか？」

「い、いや・・・いやー！！！！」

その声と共にエミリアから眩い光が溢れ出す。その光に気圧されたのか、男がエミリアから数歩下がる。

「この力・・・まさかあなたは・・・！？」

「何・・・！？」

と、同時に大木に縫い付けられて蜂の巣にされていた方にも、変化が起こる。

「ワタシの・・・エミリアに・・・手ヲ・・・出スなア
！！！！」

そう叫ぶと共に、何時の間にやらSEEDフォームと化した大木から伸びる毒々しい模様の触手が、リアの身体を戒める全ての剣を一斉に引き抜くと、それらを一斉に黒服の男の方向へ、かなり適当に投擲する。さらにリアが、左腕を極太の触手のように変えて、その太い鞭のような触手を、真上から男に叩き付けるように振る。

男は飛んできた剣を無意味な程アクロバティックな避け方で避け切ると、真上からの極太の鞭をギリギリの所で後ろに飛んで避ける。そのまま忌々しい事を如実に表すような舌打ちを残して、通常では

有り得ない程大きく跳躍すると共に、その姿を晦ませる。

と、同時に姿を晦ました男の事など何処吹く風か、男が姿を晦ませると共にその場に倒れこんでしまったエミリアに、そのままの姿で駆け寄る。

「エミリア!」

それと同時に、トニオとリィナが到着する。

「おい、これは一体・・・ってかお前何だその姿!？ それじゃお前、まるで・・・!」

「ア、えエと、これは・・・あ、そンナ事ヨリエミリア!」

そう言っている間に、私が助け起こしたエミリアの容態を、リィナがチェックする。

「・・・うん、気を失っているけど、命に別状は無さそうだね。」

「ああ、良かった・・・。」

心の底から安堵する。と、後方から、トニオの声が聞こえて来る。

「あ、おいコラ! 待ちやがれ!」

その声に釣られるようにして後ろを振り返ると、真上を多数の船がリモートで飛来し、その場に居た間抜け面をしていた人達全員がそれらの船に乗り込んで逃げ出している所だった。

「何だってんだあいつら、突然ハツとしたかと思ったら一目散に逃げ出しやがった。こんなに文化保護地区を荒らしやがって・・・一人残らず捕まえてやる!」

「でも、今の人達、様子が変だったよ？　ハツとするまでは上の空みたいだったし・・・まるで、洗脳でもされてるみたいだった。」
「エえ、それに関してはワたしも・・・」

と、その時だった。エミリアの通信機が鳴り出すと共に、クラウドさんの声と映像が出てくる。

「おい！　ワレリーの船が動いたぞ！　おめえらキツチリ追い立てろ！　どうなってんだ！　オイ！　エミリア！」

・・・これは映像も同時に届けれる類いの通信機だったか。慌てて通信機に対して、自分の右半分だけが映るように身体的位置を調整する。こうしなければ、今の私をモロに見られる事になってしまいかねない。と、そんな小細工をしてる間に、リィナが通信機に顔を近づけて、大声を出して来たクラウドさんに対抗するような怒声を張り上げる。

「うるさいよ！　通信回線なんだからわめかなくても聞こえてるって！！」

「ああ？　誰だおめえ？」

「たまたま一緒に行動してたフリーの傭兵だよ。エミリアは今、怪我をして気を失ってるから、大きな声出さないで。」

そのリィナの言葉を聞いたクラウドさんの顔が、毛むくじゃらなせいで分かり辛いが確かに歪む。その顔は、悔しそうであり、心配そうでもあった。

「怪我しただと？　・・・あのバカ！　分かった、ワレリーはこっちで追うから、テメェらはとっとと戻って来い！」

「ア、はい。了解です。」

それを最後に、通信が切れる。私は依然として音を立てて燃え盛る村の方へと向き直る。その先からは、微かだが、生きた人間の匂いがした。

「・・・仕方無い、でスよね。」

そう言うと共にリアは、自分の両手の指を噛み千切る。その噛み千切った指は、地面に落ちると共にムクムクと膨らみ、形を変え、パノンへと変化した。

更に指の傷口から湧き出る黒い液体を、手近の木に塗り付けていく。すると、黒い液体が付着した場所を中心に木々を変質させ、変化させて大型のSEEDフォームへと、その姿を変える。

「・・・サあ、行クわヨ。」

そう言うと共に、SEEDフォーム達が一斉に動き始める。パノンは燃え盛る建物の中へと戸惑う事無く飛び込んで行き、中から逃げ遅れた人々を引きずり出して行く。

木々が変化した大型SEEDフォームは森に燃え広がらないように、パノンが中に誰も居ない事を確認した建物から順番に潰して行く。その統率の取れた動きはさながら一個の軍隊か、それとも巨大な一つの

生物のようだった。

そのあまりの手際の良さに、それを傍で見ていたトニオは戦慄する。

もし、こんな風に完璧な統率の元、SEEDフォームの軍勢が押し寄せて来たら？

確かにイルミナスは兵器のようにSEEDを使っていたが、SEEDフォーム自体に統率された動きは特に無く、本能の赴くままに

動くSEEDフォームは各個撃破の的だった。

もしSEEDフォームに、統率された動きが出来るだけの理性があったなら、或いはグラールは本当に終わっていたかも知れない。

リアは今、建物の解体作業と救助作業の指揮に追われているらしく、こちらの動きには気付かない。今ならこのグラールの最後で最大の危機を葬り去る事が出来るかも知れない。

そう考えたが、身体が動かない。

さっきまで一緒に戦ってきた、一時的とはいえ仲間を殺すような真似が、果たして義理に厚いビーストの、その中でも特に義理人情に厚いトニオに、そんな事が出来るのだろうか？

無論、答えはNOだ。

本当の事を言えば、リア・ゲート本人だって分かっている。このリア・ゲートと名乗る化物は、確実にその息の根を止めなければならぬ。このグラール太陽系の未来を考えるならば、絶対に『居てはならない存在』である事など、むしろ本人が一番良く理解している。しかし、死にたいとは何故だか思えない。

死ぬのであれば、人として死にたい。そう考えれば考える程に、自殺をしたいとは思えなかった。何故なら、自殺をするとは、それはつまり自分が人では無いと完全に認めてしまう事と同義だったからだ。

それだけは絶対に嫌だった。

私は人だ。

それは以前、一度放棄してしまった思いだった。

もう一度掴んだのだ。もう二度と手放したくは無い。

その思いとは裏腹に、身体を変化させ、十数ものSEEDフォームを自在に操るその時間に比例して、リア・ゲートの中の『人』は、急激に死んでいった。

第六話「私に、あなただけが意味をくれた。」（後書き）

ども！コメントのお陰でハンドレッド執筆パワーが発動してまさかの十月中投下を可能にしまった金属製の箱、ジュラルミンダインボールです！ 今回のサブタイトルも、『With me』を超訳した物になってます。ちなみに、次回のサブタイトルは既に決まっていたり？ しかも実は本編に出てたりなんなり？ 分かった人はコッソリメッセージかコメントでわっちに答えを送り付けるか、又は一人コッソリほくそ笑むと良いかもデス！

さてさて、次回はついに致命的なお話になっちまいやがりますね！ 今からどう言う感じで書こうかって頭がビリビリ言っちまいやがってますですよ！

今度こそ本当に遅くなると思いますので、気長に待て次回！ では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204t/>

ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

2011年10月26日14時00分発行